



Title	事実と虚構のはざまで：ティンペーミン60年代の二長編
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1993, 3, p. 71-118
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99661">https://hdl.handle.net/11094/99661</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 事実と虚構のはざまで —テインペーミン60年代の二長編—

南 田 みどり

## はじめに

1957年に長編『東より日出するが如く』の連載が終了した後、テインペーミンはまる10年間長編小説を書かなかった。10年もの空白は、その作家生活史上かつてないことであった。そして1968年と69年、『ティーダーピョン』『海の旅人と真珠姫』が続けて出版された。

10年余の凝縮された執筆意欲の発現である二長編は、独立・抗日闘争を描いた前作と異なる傾向を持った。それはテインペーミンの10年余の行動の帰結であると同時に、この時代を生きる作家共通の問題を内包した。二長編はまた、70年代のテインペーミンの小説の新傾向への過渡的作品となった。

反植民地闘争と反植民地小説執筆を同時期にスタートした彼にとって、小説は最愛のジャンルであり、その政治的主張を宣伝する格好の舞台であった。1957年までは、その著作の半数を小説ないし文学関係が占め、そして小説の大半は、社会性をとどめていた。しかし58年以降、小説は激減し、著書の大半は文学関係以外で占められる。その契起は、58年のボウタウン新聞社創設であった。彼は社会に対してその主張を、虚構によって発信することから、事実の叙述によって直接的に発言することに傾斜していく。

1950—57年のテインペーミンの著作に見られる主張の特徴は、すでに前稿で明きらかにした。<sup>(1)</sup> 本稿では、『ティーダーピョン』『海の旅人と真珠姫』に至る1958—68年の、彼の著書に現れた主張<sup>(2)</sup>の特徴を、ジャーナリズム全般、文学関係から各々明きらかにし、それらとのかかわりも含めて二長編の特徴と問題について考える。なお、この時期の彼の著作の柱の一つである紀行については、

『海の旅人と真珠姫』との関連であれるものとする。

## 1. ジャーナリストとして

1958年、テインペーミンは人民統一党（PUP）書記長、そして故郷ブダリン選挙区選出の野党連合ビルマ連邦民族統一戦線（NUF）議員として活動していた。NUFは、56年選挙の与野党伯仲を頂点として、結成以来の内部矛盾を徐々に深化させていた。4月の与党AFPFL分裂は、NUFの団結を強化するどころか、テインペーミンと左派の対立を激化させた。<sup>(3)</sup>

一方PUPは、7月の恩赦令<sup>(4)</sup>に応えて投降した白色人民義勇軍（PVO）と合併し、人民同志党（PCP）を結成した。PUPとPVO間には、48年問題など過去の分裂への見解の相違はあったが、それについては党内論議を継続することとなり、現状規定で部分的一致を確認して合併したという。<sup>(5)</sup>

政党活動の一方で、テインペーミンは、それにある限界を見い出していたと思われる。それは、PCP結成とほぼ同時期の8月11日、彼が「自己の政治路線実現」のため、民主主義発展と社会主義建設をかける日刊ボウタタウン紙を創刊<sup>(6)</sup>したことによががえる。しかし反資本を旨とする同紙に企業の大口広告が掲載されるはずもなく、NUF支持層の支援も予想外に少なく、創刊以来経営は困難であった。<sup>(7)</sup>

さらに同紙が直面した困難は、58年11月の第一次クーデターで登場したネーウィン選挙管理内閣の言論出版弾圧であった。軍事政権は政界腐敗一掃をかけて種々の強行措置を断行。NUFから清廉派AFPFLに至るまで逮捕者は続出した。ボウタタウン紙も一時は閉鎖の憂目にあい、記者らが投獄されたという。<sup>(8)</sup>

反軍国主義・民主主義を求める世論に軍は一時的妥協を余儀なくされ、59年12月に国会は解散。60年2月には総選挙が実施される。テインペーミンは1月から2月にかけてブダリン選挙区を遊説し、軍国主義者も AFPFLも排除した民族統一連合政府建設<sup>(9)</sup>を訴えた。

NUFは勝利を信じて疑わなかったが結果は全員落選。清廉派の圧勝であった。獄中に左派指導者を多数留めたこの選挙戦の結果を、NUF左派は、右派指導者

の指導性欠如と逮捕への恐怖心に起因すると批判した。<sup>(10)</sup>

60年4月、第6次ウー・ヌ内閣組閣。ティンペーミンは、清廉派を連邦党と改称した政権党と一定の友好関係を保ったといわれる<sup>(11)</sup>が、62年1月には同党の民衆不在の内部抗争に批判的態度も示している。<sup>(12)</sup>

1958-61年にボウタタウン紙連載後出版された彼の著書は、伝記『チョーニエイン』と紀行『東を眺めつつ西へ行く』<sup>(13)</sup>の二冊のみである。その後選集に収められた作品でも、この時期のものは非常に乏しい。一方著書に所収のボウタタウンの主張は、62年以降急増。とりわけ63年から67年に集中している。<sup>(14)</sup>それは、ティンペーミンが軍事政権に多大の「期待」を抱いた時期にはほぼ一致すると思われる。

1962年3月の第二次クーデターから63年11月の反政府軍との和平交渉決裂までは、58年クーデターで民衆や合法左翼の反応を試した軍が、彼らの支持をとりつけるべく慎重にことを運ぶ期間であった。ティンペーミンの62年3月から6月にかけての主張からは、軍政への控えめな好意がうかがえ、<sup>(15)</sup>NUF左派もまた、58年当時の国軍の反共的部分が後退したととらえている。<sup>(16)</sup>

62年7月8日付でティンペーミンは、「民主集中制」に従えないとの理由でPCPを離党した。そこには48年の白旗共産党（BCP）離党時同様、マルクス主義政党における言論の自由という普遍的な問題が存在した。<sup>(17)</sup>

一方軍は7月4日、「ビルマを社会主義に導くため」の中核となる政党の設立を発表。7月31日、名称を「ビルマ社会主義計画党（BSPP）」と決定した。しかしティンペーミンのPCP離党は、BSPP入党のためではなかったと見られている。<sup>(18)</sup>公には彼は、「親しい友人」として党外から、批判すべきは批判し、彼らが働く人民の立場に立つよう協力することが最良の方法だと述べ、同調者の立場を表明した。<sup>(19)</sup>

58年と62年のクーデターの相違のひとつは、軍が「革命」評議会を結成して「革命」政府を樹立し、4月には「ビルマ社会主義への道」を発表するなど、社会主義的装いをこらした点にある。ティンペーミンがそれを支持した現実的根拠は、すでに50-57年の主張に散見された<sup>(20)</sup>が、以下のようにまとめられよう。

第一に、彼は地下のマルクス主義政党の体質に民主主義と相容れない封建的要

素を感じとり、彼らの指導する血塗られた「革命」は不要と判断するに至った。

第二に、彼がめざしたのは、民族資本家はじめ、ほぼ全人民をまきこんだ、ビルマの経済的自立達成のための民族民主革命であった。それには地上左翼の大同団結が前提だが、彼らの大半はビルマが政治的独立を達成していないという白旗赤旗両共産党（BCP,CPB）の見解を支持し、過去のBCPにおけるティンペーミンの「右偏のあやまち」への攻撃の手もゆるめなかった。<sup>(21)</sup> 両共産党への「幻想」が存在する限り、地上左翼の団結は不可能であり、彼の「革命」実現の見込みはなかった。

第三に、革命指導者としての地上・地下両左翼への失望が、国軍への期待に結合したのは、ビルマ合法左翼に多少なりとも見うけられる国軍への特殊な思い入れによる。それは、抗日を共に闘ったという「栄光」の経験であった。<sup>(22)</sup> 反ファシズム闘争の栄光の過度の強調が、闘争主体に内在するファシズム性を見逃がすことにつながるとは、この時代のティンペーミンには知るよしもなかった。

第四に、「ビルマ式」を銘打ち、独自の「理念」を披瀝したものの、統治の枠組を既存社会主義国からの借用に負うこの「革命」は、新しい実験であり可変物であった。いわば社会主義の素人である軍の実験に、玄人のティンペーミンが協力する中で、自己の路線を注入することが、理想へのより可能な早道だと、彼は踏んだのではあるまいか。既製組織の自己流活用は、人民革命党入党以来の彼の常套手段<sup>(23)</sup> であった。彼はこの「革命」を1300年闘争に始まるビルマ革命のエピローグだと賞讃さえしている。<sup>(24)</sup>

第五に、この「革命」に対して社会主义大国が、各々の思ふくから批判を手控えたことも、彼の軍政支持を励ましたと考えられる。<sup>(25)</sup>

このティンペーミンの軍政支持は左右からの攻撃の標的となり、それは反政府軍との和平会談のあった63年、ピークに達する。63年4月30日出版評議会は、貢数組版縮小決定に違反して会の威信を傷つけたという理由で、ポウタタウン紙を除名した。その背景には当時のジャーナリストの大半が軍政に反撥し、ポウタタウン紙が政府宣伝を配給される数少ない新聞だったという事情もあった。<sup>(26)</sup>

ティンペーミンの孤立は作家協会でも同様であった。合法左翼の分裂はすでに作家組織にも及んでいたが、62年11月には政治論議ぬきで文学に関する意見交流

を目的とした民族文学会議が開催され、ほぼ全作家が出席した。彼は議長をつとめたが、ここでも若干の政治論議が蒸返された。<sup>(27)</sup> さらに政府の和平会談提案一週間後の63年6月18日、作家協会第六回大会で「和平の破壊者テインペーミン不<sup>用</sup>」という会長不信任案が出され、彼は票決前に会長を辞任した。<sup>(28)</sup>

一方、ボウタタウン紙から「極左同様反革命を企図する右翼社民」と攻撃された作家ヤンゴン・バスエが、9月17日から26日にかけて9通の公開書状をテインペーミンにあて、彼を「狡猾な和平の破壊者」と批判する事件も生じた。<sup>(29)</sup>

和平会談に関するテインペーミンの主張は『交渉の内外』<sup>(30)</sup>に詳しい。彼は武装解除してBSPPに協力することが「革命の新戦略」とすら説く。そして「革命政府」が「誠意」を尽くしテーブルを整えたにもかかわらず決裂したのは、民族のエゴと地下政党のセクト主義であり、もともと会談成功への熱意も青写真も持たなかつた彼らは会談を宣伝の場として利用したにすぎず、彼らに幻想を持ち同調した地下左翼にも責任があると批判した。

交渉決裂後、左右政治家への弾圧逮捕、64年3月の社会主義建設妨害排除法によるBSPP以外の政党活動の禁止、全団体の登録制、4月からの企業国有化開始などの布石が矢継ぎ早に打たれ、官僚主義、生産停滞、人権抑圧など既存社会主義国と欠陥を共有する強権政治が展開されるに至る。

64年8月11日、ボウタタウン紙は国有化された。これはテインペーミンの望むところであり、<sup>(31)</sup> 出版界における同紙の孤立は解消した。同紙の論説を通して彼が62年以来主張してきたのは、第一に「ビルマ社会主義」の枠内での民主的ジャーナリズムの確立である。たとえば新聞が民衆の要求を伝え、政府は検討中の問題をも公開して民意を問うという、<sup>(32)</sup> 情報公開を前提とした民衆と権力のパイプ役たらんとした。しかし66年には、政府が読者の批判に動搖こそそれ反論しないのは「社会主義建設」にマイナスだという主張<sup>(33)</sup>も見られた。

第二に国家建設上有用な人材の育成－教育の重要性である。とりわけ62年のラングーン大学事件<sup>(34)</sup>と63年の和平会談の時期には、大学評議会委員として大学問題についての発言が目立った。彼は当局の弾圧で無用な犠牲の出ることを恐れ、大学教育に注がれる血税と国民の期待を自覚せよと学生たちに説く。<sup>(35)</sup> あるいは地下政党に同調する学生たちに、科学を学び、「眞の社会主義建設」に役立てよ

と説得をこころみ、<sup>(36)</sup>過激な学生たちは「BCP、CPB、帝国主義者、封建主義者が学生の皮をかぶったもの」で、その策動と教師の譲歩が権力の介入や大学閉鎖を招いたと批判した。<sup>(37)</sup> その他、中間労働者育成のための専門学校の振興、大学合格者の受け入れ体制、大学当局の人事刷新、学生の勤労奉仕などへの広範な言及もある。<sup>(38)</sup>

第三の主張は民族主義と社会主義、伝統と革新の合一である。民族主義は「社会主義建設」に貢献する児童文学の奨励や歴史観の確立、史実の見直しなどの発言<sup>(39)</sup>にも見られるが、ビルマ語第一言語化に関するそれに最も濃厚に現われる。

彼はまず、独立闘争時以来のスローガンであるビルマ語尊重は、「革命的伝統の継承者」たる現政権によって実現され、それは労働者農民が知識・技術を修得して「革命」に貢献するための手段でもあると説く。<sup>(40)</sup>

また「革命」普及のために少数民族の言語を使用し、彼らの文化を尊重して英米文化の影響を排除すると共に、ビルマ語を共通語として経済開発に工業振興に、協力邁進することも重視する。<sup>(41)</sup>

さらに彼はビルマ語の普及のみならず向上にも言及する。ビルマ語を媒介語とする大学教育の実現を評価し、英語教育は必要最低限度でよいと主張し、文法や綴字法の統一、学術用語のビルマ語化などについても多数発言した。<sup>(42)</sup>

「民族主義と社会主義の合一」に最も貢献した彼の著作は、67年7月にボウ紙連載後緊急出版されたベストセラー『毛沢東の中国とビルマの主権』であろう。BCPをあやつりながらビルマ政府との友好も保ってきた中国が、67年6月の反中国人暴動<sup>(43)</sup>以来、公然とBCP支持・ビルマ政府打倒を主張した事件に関して、彼は両国人民の歴史的友好を強調しつつも、「革命の輸出」を企てる毛沢東主義を批判、分析した。<sup>(44)</sup> この力作は客観的には、経済政策の矛盾や反政府軍の流通機構襲撃などで66年の統制解除後も深刻する米不足から、民衆の不満をそらす反中国キャンペーンの一環として有効に活用されたと思われる。

1958年から68年の10年余は、合法左翼運動に飽足りなかったティンペーミンが、ジャーナリストとして主張を直接世に問い、軍事政権に理想実現の夢を託して「ビルマ社会主義」のよき息子たらんと努めた時期であった。この時期に初版で出版された著書は22冊。<sup>(45)</sup> その生涯に出版されたものの三分の一を占める。うち

半数近い9冊が文芸評論や小説選集など文学関係である。それは、体制がテインペーミンの文学者としての価値をとりわけ必要としたことを物語ろう。

では、ジャーナリズムに啓蒙・宣伝・扇動の途を見い出していた彼にとっての文学とは何であったのか。それは彼の理想実現の有効な武器となり得たのか。

## 2. 文学に見る建前と本音

40年代末の新文学論争以来のテインペーミンの主張は、微妙な変化を見せつつ50年代も継承されてきた。たとえば作家は第一に、抑圧される階級解放のために、第二に解放の道筋を示しながら、第三に人民の中に題材を求めて書くべきだという主張のうち、50年代には第一と第三、とりわけ作家が民衆の中に入り彼等の様々な生活のためのたたかいを描くべきだという点が強調された。<sup>(46)</sup>

では58年以降それらはどのような展開を見せるのか。何を書くかについて、彼は前言を継承して労働者農民を主人公とするよう主張する。ただそこには、過去とは意味合いの異なる要素も加わった。その要因は新たな文学状況である。

58年8月テインペーミンは、主権国家となって10年の文学状況の変化に、学生数、出版物発行部数の増加、新文学理論よりも実践つまり創作の増加、形式の新奇さよりも内容の重視などの傾向をあげた。具体的には、筋より人物描写を重視した恋愛小説の増加、筋に恋愛を不可欠とする発想の減少、全国各地、各職業分野からの作家の誕生、翻訳小説の増加、若干の技法すぐれた高名作家はじめ多くの作家が、労働者、農民、都市在住貧民の立場から彼らの生活をありのままに書こうと努めている点を評価した。<sup>(47)</sup>

それらの変化をふまえた上で彼はさらに、労働者農民と体制の矛盾を明確に描くべきだと強調する。つまり、労働者農民が飢えと貧困にあえぎ刑事事件をおこすという書き方は間違いではないが、大多数の民衆は貧しいとはいえ盗まず殺さず、抑圧と政情不安の中で日々平凡な労働に勤む。ゆえに日常的労働の中で出会う困難の根源としての、体制と民衆の矛盾を反映する文学が必要だと強調する。<sup>(48)</sup> 61年にはこれらに、民族独立の防衛と民族精神を高める方向性、反封建・民主主義という目的が付加された。<sup>(49)</sup>

62年のクーデター後も、たしかに労働者農民を主人公にという主張は継承された。たとえば62年4月彼は、「革命の主人公」である多数者たる彼らを、文化・文学の主人公にと訴える。<sup>(50)</sup>しかし彼らと体制の矛盾は、もはや強調されない。この「革命」を、労働者農民を基礎に「社会主义」に至るものとなすべきだと考えられたからに他ならない。

62年以降の彼の文学的主張の第一に、「労働者農民を主人公に」をあげるとすれば、第二には「ビルマ社会主义建設」の思想闘争の一翼としての文学の位置づけをあげたい。彼は62年、他のメディアにも増して文学の国民への影響を絶大とみなし、64年にはその中でも長編小説を重視した。<sup>(51)</sup>彼はまた66年、国有化にもかかわらず「社会主义的思想文化」の普及が弱いのは、中小私企業の多い出版界と、映画界の国有化の遅れによる資本主義文化残存のためだと指摘する。<sup>(52)</sup>

「資本主義文化排斥」は、無制限の言論出版の自由を有害視する発想を導く。彼は芸術家が「労働者・人民・革命」に貢献する枠内で内容形式を選択すべきだと主張し、<sup>(53)</sup>表現の自由を要求する一部作家と論争し、<sup>(54)</sup>上質の文学作品育成のため政府の指導の必要性を説くに至った。<sup>(55)</sup>

彼が政府に指導・援助を仰いだ背景には、ビルマ作家の社会的経済的地位の低さも存在する。「自由競争」の出版界において、作家は応々にして出版者の意のままで、報酬も十分ではない。「社会主义経済」の発展でせめて文学賞賞金が作家の年収分に相当するようにという期待も表明された。<sup>(56)</sup>

彼の第三の主張は、科学的客観的批評の確立である。彼はまず、作家の個人的な批判ではなく、作品自体を批評することを強調する。<sup>(57)</sup>また、政治にかかわる者に客観的批評はできないという意見を、一見中立を装いその実文体重視で反人民的だと批判する。<sup>(58)</sup>

このような基準をもとに、彼は文学の再評価もこころみた。ビルマ文学界の星と讃えられるウー・ポンニヤについて、その文体の美しさに目を奪われて内容の浅さ、不整合性が見えない人々が多いと批判。<sup>(59)</sup>ウー・ポンニヤをビルマのシェイクスピアの例える風潮に対しても、その作品の内容的平凡さと洞察力のなさゆえに比較にならない<sup>(60)</sup>と、形式重視の批評に反対した。

民族詩人タキン・コウドーフマインについては、その文学以外の業績の過大評

価を戒め、むしろ同時代作家のレーティパンディッタ・ウー・マウンダーを、その社会主义思想接近の思想的背景において評価する。<sup>(61)</sup> 30年代のキッサン文学に対しても、同時代の文学的社会的背景を含めて再評価すべきだと主張した。<sup>(62)</sup>

これら1958-68年のテインペーミンの文学的主張は、同時代の彼の小説もまた「理想社会実現」のための思想闘争の武器として活用されたかの印象をもたらす。それは彼自身が「扇動のない純文学を私は絶対に書かない」<sup>(63)</sup>と述べていたことにも起因する。さらにそのジャーナリズムでの「活躍」や過去の政治活動ともあいまって、「彼が記すすべての文には、その時代の政治活動、社会変革、社会体制などのいざれかが入っているのが常である」<sup>(64)</sup>などといったイメージの先行も存在した。

しかしテインペーミンは、作家として出発した1933年より人生の機微のみを語る、扇動とはかわりのない若干の短編を書いてきた。<sup>(65)</sup> 彼を基本的に政治小説作家ととらえる評論家タイソウも、それらに注目し、人間描写が巧みでそれなりに愛すべき作品だと評価している。<sup>(66)</sup>

1958-68年に書かれた6短編も、30年代のそれらの短編に共通する傾向を持った。6短編は、傍観、惑い、老い、日常的感慨を扱う。それらは労働者農民を主人公とせず、「社会主义建設」の思想闘争の武器とはなり得ない、つまりテインペーミンの主張と矛盾する作品であった。<sup>(67)</sup>

作者自身が息子の沙弥式を語る「シントウマナ」(1958. 6)、飼犬の結婚問題を<sup>(68)</sup>語る「ティッサことセインネット」(1966. 11)は日常の周辺を断片的に描く隨想風私小説であった。一方、ひとりの老人の視点で老いの惑いを語る「老教師の問題」(1959. 6)、元恋人であった老人たちの視点で青春への想いを語る「日没時の愛」(1965. 10)は、作者の影を離れた虚構であった。

老人の生と性への衝動をあからさまに語った「老教師の問題」について彼は64年2月、「多くの人が、その小説を読む前にタイトルを見て、老牛老馬の如く老いた教師たちが、衣食住に関していかなる困難に出会っているかを問題にして書いているものと思ったらしい。しかし読んでみると別種の問題であることがわかつて愕然とした」<sup>(69)</sup>と、反響の大きさにふれ、老教師の妄想によるときめきは、作家が書くことを抑制すべきでない「基本的人間性の権利」だと述べる。64年のこ

の主張は、彼の文学的主張と対立するはずのものであった。

「基本的人間性の権利」が唱えられた同年、50才を迎えたティンペーミンの死を意識した発言も見い出される。彼は来世を信じず、火葬後は灰を肥料とすることを望む。<sup>(70)</sup> しかしその一方で、「年をとるにつれ私は健康に留意する。つまり年をとるにつれ渴生の愚挙を忘れ、生に執着する。執着するにつれ健康と体力を誇示したくなるのである」<sup>(71)</sup> と、死後を無とする悟りと生への執着の矛盾を語る。

「日没時の愛」は、年と共に、肉体的衰えと共に多様化する老人の愛を描く。作中の老人は人生と愛を一日に三色変化する花に例えて、「午前中に生まれる愛は純白である。正午を過ぎて生まれる愛は淡いピンクとなる。日没時の愛は真紅である」<sup>(72)</sup> と述べる。「日没時の愛」の翌年の66年彼は、社会の物質的基盤である社会的生産活動と人類存続のための出産、つまりものとひとの生産が、社会の精神的基盤である愛憎をも、もたらすのであるから、二つの生産を示す中に様々な愛をちりばめるとよい作品ができる<sup>(73)</sup> と述べている。「日没時の愛」はこうした様々な愛の断章でもあった。

58年以降あらわれたこれら新たな傾向の他に、50年代から継承される弁護士の一人称小説がある。50年代の社会派短編の中でこれら弁護士ものが異色であったように、58-68年の日常的短編の中にあって弁護士ものは、かろうじて社会性の名残りをとどめる点で異彩を放つ。

「その彼女とバラスィートゥ」(1964. 11) は、闇なしに生きられない庶民の世界と弁護士のかかわりを描く。弁護士は気まぐれ的好奇心から、投降共産党員の踏む輪タクで闇屋の娘を尾行する。彼は、僧でも闇屋でも売春婦でも、乗客が誰であれ金をもらって目的地へ運ぶ輪タク稼業と、「国民どうしであれ、国民と政府の間であれ訴訟が起きると、原告側から雇われても、被告側から雇われても報酬をもらって彼らの言いなりになる」<sup>(74)</sup> 二枚舌の弁護士稼業との間に一種の共通性を見い出す。しかし、だからといってそれ以上輪タク屋と親しむわけではなく、あくまで傍観者にとどまる。作家に対し民衆の中に入るよう主張したティンペーミンは、この弁護士シリーズで民衆と知識人の遊離を示した。

この弁護士はまた、志操堅固な、「社会主義」下の期待される人間像ではない。「合法的放蕩者」(1966. 1) の弁護士は、派手なアロハシャツに青いベレー帽、

顧客の贈り物の杖を持ち、この格好ではとても弁護士には見えまいとほくそ笑む。大人は子供たちに小ぎっぱりとビルマ人らしく装えと言うが、一体自分のいでたちは何国人的か？、インド人でもなし、ビルマ人でもなし、インドネシア人でもない…「しかし着心地がよい。とても解放された気分だ」<sup>(5)</sup>と彼は思う。

和平交渉に現れた民族指導者のアメリカ風いでたち<sup>(6)</sup>や、大学生の「服装の乱れ」を批判し、大学生にも制服を、教師は教師らしい装いを<sup>(7)</sup>と主張したティンペーミンの主人公にしては、意外な奔放さである。この弁護士が手伝いの娘を妾にしようとして思いとどまる有様もまた、彼のいう基本的人間性であり、数ある人生の断章であった。

30年代の短編のみならず、長編『愛すればこそ』（1952）にみる芸術と純愛、『東より日出するが如く』の主人公が時おり見せる非政治的な逡巡など、ティンペーミンの小説世界には、その政治性と一見矛盾する人間性、あるいは個への執着が、濶のように沈み続けてきた。58-68年の数少ない短編小説は、その沈澱物の浮遊であった。

政治的主張が封じられていた頃、彼の小説はその発現の手段として輝いた。ボウタタウン紙創刊や「ビルマ社会主義」への協力で、政治的主張の場が拡大された時、彼の小説は大所高所から離れ、個へと傾斜した。そしていずれの時代にも普遍であるという「基本的人間性」の描写に至った。それが体制と矛盾するものであることを、体制の尖兵となったティンペーミンは早々と感じっていたはずである。その意味で彼は、常に抑圧され封じられる部分に目を向けてきたと言えよう。そこにはまた、迫り来る死を意識した生への執着があった。浮遊し始めた沈澱物はすくい取られ、70年代の新傾向の小説の中に生かされていく。しかしその前に、彼にはなすべき作業があった。

### 3. 『ティーダーピョン』

ティンペーミンの短編世界とその建前の顔との遊離を顯示した10年余を経て書かれた『ティーダーピョン』は、どのような意味を持ったのか。本章ではまず過去のティンペーミンの小説との比較でこの長編の特徴をあきらかにしてみよう。

第一に、この作品のタイトルには、主人公とされる女性名がついている。女性名を冠したものは、他に短編「愛國者キン」(1933. 9)がある。大義と愛の間で揺れるキンは、文字どおり小説の主人公とされた。一方『ティーダーピョン』は、1951年5月から6月、語り手であるミヤトウインが偶然ティーダーピョンの数奇な運命とかかわり、その問題解決に協力し、その愛を獲得するまでの45日間の記録である。事実上の主人公はむしろミヤトウインだと理解する方が自然のようである。

ゆえに第二に、この作品は事実上の主人公による事件の記録の形式を取った虚構であり、『東より日出するが如く』の一人称回想形式、あるいは弁護士シリーズの一人称の語りなどの手法が踏襲される。

そして第三にこの作品は、小説家を語り手かつ主人公に、彼の生活と意見を述べさせる作家小説でもある。ミヤトウインは岐路に立つ中堅作家<sup>(78)</sup>である。彼は第二次大戦で高校の課程が中断されるが、生来の読書好きから戦後作家となり、4、5年の苦節の後ある程度の成功を獲得した。新文学論争が起こると、まじめな作家の常として、抑圧される階級のために書こうと努めるが、そうした作品は売れないで出版者に敬遠され、また実際の創作は理論ほど簡単にはいかず、筆が進まない。

彼は最新作に『一年以内に和平を』という政府スローガンもどきのタイトルをつけ、反政府軍も政府も支持せず和平を切望する民衆の意志をこめ、戦火で田舎から都市へ逃れる貧しい人々を描いた。しかし、タイトルが政府的であるとか、テーマはよいが政治的に中途半端で農民や都市在住貧民が十分描けていないなどと批判された。

彼の技法の巧みさを買う出版社は、新文学の精神をそれとなく入れてもよいから、恋愛を中心に娯楽路線で書けばタードゥ、ティンデー<sup>(79)</sup>をしのぐものになると迫る。そこで彼は、待ちわびた恋人が予期せぬ頃に突然出現するという情景の取材にラングーン駅にでかけ、ティーダーピョンと出会うというわけである。

『東より日出するが如く』の主人公は作家志望だったが、作家活動には至っていない。しかしティンペーミンは一人称作家小説「嘆きの歌」(1938. 9)をすでに書いている。それは、編集長から政治色ぬきの芸術的な作品を書くよう命じ

られ題材を求めて町に出た「私」が、歌い踊り物乞いする幼い兄妹を見て、どうしても政治色ぬきの作品は書けないと嘆く小品であった。

『ティーダーピヨン』と『嘆きの歌』の時代背景には13年のへだたりがあるが、政治的主張を入れない作品を書くよう命じられて町に出る主人公の姿は、出版業者に牛耳られる作家の立場が、独立前も後も変わらぬことを物語る。

第三にこの作品は、作者の分身ではない中間の人物の発展過程を示す。「嘆きの歌」の、作者の分身を思わせる、当時には先進的な作家に対し、ミヤトウインは50年代初期の良心的中堅作家を代表する。同様の中間の人物を主人公とした『東より日出するが如く』における発展の要素は愛と闘争、『愛すればこそ』においては愛と芸術、そして『ティーダーピヨン』では愛と創作となる。

ミヤトウインの発展過程は次のように描かれる。彼の「新路線」の小説の構想は、ティーダーピヨンという強烈な存在の闖入によってゆらぎ、彼はそれを中断して新たな小説に着手する。そのタイトルを、当時野党が、政府系役人、政治家、事業家のみを利すると批判した AFPFL の福祉国家計画にちなんで『福祉国家の妹』としたのは、そこに政府支持者も、罹災者も、都市の貧民も労働者も、反政府軍の圧政に苦しむ「解放区」の農民も、万人が豊かになる理想社会建設の願いをこめたためであった。

新しい小説にもティーダーピヨンの影がちらつき出すに至って彼は、個我との間に距離を置くほど作品の出来はよくなるという、彼なりの創作上の信条の変更を迫られる。失望しやすく動搖しやすい性格も災いして、真剣な恋愛経験を持たなかつた彼は、人間社会の基本的様相たる愛の本質が時代を経ても不变であるがゆえに、古今東西の文学に学べば恋愛小説は書けると主張して譲らなかつた。しかしティーダーピヨンへの愛は彼の筆を鋭くとぎすまし、彼は、社会を描けば社会の一部である作家の個我を入れざるを得ず、それを小説全体を支配しない範囲でとりこめば作品は輝くという結論に至る。そうして彼は、内乱で田舎から都市に逃れて工場で働く娘に兄のように慕われ、娘を内心愛しているが告白しない青年職工長の物語にティーダーピヨンへの想いを練り込んでゆく。

第四に『ティーダーピヨン』は、テインペーミンの過去の長編と時代設定上の連續性を持つ。彼の『進歩僧』（1936）、『ストライキ学生』（1937）、『現代の悪

靈』(1940)は執筆期とほぼ同時代の1936年から40年頃のビルマを背景とした。そして『東より日出するが如く』(1953-57)は1936-42年を、『開けゆく道』(1949)は1945-47年を、『愛すればこそ』(1952)は1947-48年を背景にした。『ティーダーピョン』の1951年という時代は、それにほぼ連続するものである。時代的叙述の配分に差はある、執筆期と背景のずれはある、ティンペーミンの長編の時代は、1930年代から50年代へと次第に移行しつつあった。

第五に『ティーダーピョン』は、『愛すればこそ』や『東より日出するが如く』と逆に、一人の女性と複数の男性の愛の葛藤を描くが、ティーダーピョンとミヤトウインの成就された愛の型に、前二長編の一つの型が適用される。それは男が、ひとまわり前後年下の優秀な女性の成長を楽しみつつ愛する「庭師型」<sup>(80)</sup>の愛である。

27才のミヤトウインは、ティーダーピョンの美しさとビルマ女性らしさ、そして歳不相応の聰明さに魅了される。これまで同世代の女性との対等な愛を望めなかつた彼は、庇護者という有利な立場で初めて、歳不相応に聰明な女性との愛に目覚め、歳相応な大人へと成長する。一方この完璧な理想的女性が彼に心を寄せたのは、保護者への信頼が愛に変わったためであり、かつまた彼女の資質に値する同年令の男性が見い出し難かったためであった。

第六にこの作品には、前二長編に共通する女性事業家像が三たび登場する。過去を謎に包み、病身の夫をかかえて働く『東より日出するが如く』のマ・ミヤフミー、離婚後一人息子に財を残すことを生き甲斐に働く『愛すればこそ』のマ・フラティンらが主人公の誘惑者であったのに対し、『ティーダーピョン』のマ・フラタンは、美しく商才にたける共通性を持つが、年令的に二人より10才上の40過ぎである。ティーダーピョンの母として、娘の将来のために貧乏作家との仲を裂こうとする母親性、前夫が明かすその過去の不実が強調されるという相違がある。

第二次大戦前、小地方都市の官吏の娘であった彼女は、同郷の無学の商人バチュンと出奔。首都に出るが、外国人に牛耳られる商業界を去り隠亡となった夫を忌み、華やかな生活に憧れて印僑の商売を手伝ううち、妻ある上司セイントゥンのもとへ走る。大戦で帰国した印僑の財を継承したセイントゥンの片腕として事業

を拡張。戦後ビルマ有数の民族資本家となっている。

このように『ティーダーピヨン』は、女性名をタイトルにしながら、事実上の主人公である語り手による記録形式の作家小説で、前作同様中間人物的主人公の発展過程を示し、作者の過去の長編と時代設定上の連続性を持ち、主人公達の愛の型や登場人物のひとりに前作の影響が見られる小説であった。そこには、同時代の6短編の影はない。しかも、6短編の日常性をふり切るかのように、その構成、展開、人物像は、過去の彼のどの小説にも増して特異である。

作品の一つの柱は貧乏作家の愛と創作であり、もう1つの柱は修道院（コンベントスクール）にあずけられて育った娘の養育をめぐる、身分の異なる父母の争いである。時は前者を中心に流れ、後者は回想として次第に明かされるという点で、ミステリー風恋愛小説的性格も持つ。

全21章はおよそ4部に分れて展開する。第一の部分はティーダーピヨンとミヤトウインの出会いをめぐる導入の5章である。それは、ラングーン駅でセイントウンとティーダーピヨンの姿に興味をそそられたミヤトウインの尾行、同様に二人を追うバチュンとの合流、セイントウンに拒絶的対応を示すティーダーピヨンの救出、身分を明かさず後事を託して立ち去るバチュン、天涯孤独の筈のティーダーピヨンに養育を申し出た二者のうち大学進学の条件を示したセイントウン夫妻を選ぶが、迎えのセイントウンに不信を抱いたというティーダーピヨンの身の上話から成る。

第二の部分は、男世帯の規則的生活に及ぼすティーダーピヨン同居の波紋を描く8章である。ミヤトウインの共同生活者である画家のタンスイン、機械工のタウンハン、料理人カンヤラのとまどいと高揚。ティーダーピヨンと彼らの接近へのミヤトウインの焦燥と保護者的抑制の葛藤、ミヤトウインだけに明かされる、ティーダーピヨンのいま一人の養育者候補バチュンの職業、早々と彼女に求愛し失恋するタウンハンの転居などから成る。

第三の部分は、ティーダーピヨンの不在にともなうミヤトウインの懊惱と過去の開示の4章である。タンスインの描いた肖像画を見たマ・フラタンの訪問と説得によるティーダーピヨンの転居、初めて愛を自覚したミヤトウインの苦しみ、同様にティーダーピヨンを愛していたタンスインとの友情の回復、訪問しても会

えず二つの世界の断絶を知るミヤトウインの絶望、バチュンの再訪と長い打ち明け話から成る。

第四の部分は、ミヤトウインの愛とティーダーピョンの身のふり方の二問題解決の4章である。ティーダーピョンからの上流社会の虚飾生活に関する失望の手紙、ミヤトウインから彼女の出生の秘密を明かす手紙の送付、小説の完成、ティーダーピョン奪回のためのタンスインとバチュンの秘密行動、話し合い不首尾に逆上したバチュンのセイントゥン射殺、警官の狙撃で死の床にあるバチュンとティーダーピョンの父娘の名乗り、バチュンの整えた家にそのゆかりの人々と住むというティーダーピョンの選択、ミヤトウインの求愛、葬儀から成る。

主要人物を取り巻く人々は、中肉中背の美男、潔癖で不愛想、ミヤトウインにティーダーピョンとの接し方を注意され反抗的態度を示す、同居人中最も収入の多い22才のタウンハン、信仰深く忍耐強く冷静、外国人富豪の肖像画で稼ぐことに屈辱を感じ伝統絵画に転向を目指す、年令よりふけて見えるが30過ぎのタンスイン、タンスインを慕って押しかけてきた元英国大使館員宅の料理人カンヤなど、個性的な面々である。

しかし最も特異な人物は、ティーダーピョンとバチュン父子であろう。ティーダーピョンは、初対面のミヤトウインらを一瞬にして信頼し運命をゆだねる大胆さ、神に仕える狭い世界を脱出しようとする自立心、ダゴンターカー<sup>(8)</sup>を愛読する知性、男性に対してしなを作らずはきはき接する卒直さ、タウンハンの求愛を拒んでも胸におさめる細心さ、母の生活になじめぬ質実さ、自分の運命が自分ぬきで左右されることを潔しせず、父の愛の深さを知るや母と関係を断つ決断力を持つ。

彼女の聰明さは修道院生活に負うところが大きい。それはまた、彼女に独特の民族意識をもたらした。ビルマ土着の伝統に沿ったカトリシズムを目指すビルマ人シスターの薰陶を受けた彼女は、修道院育ちを非ビルマ的で派手好きだと見るミヤトウインの偏見に対して、華美な娘は修道院の外にも多い、問題は何をビルマ的とみなすかだと説き、たしかに我々はズボン姿でテニスやバトミントンに興じ、精進日の戒律に従わず、年長者を跪拌もしないが、バスの席を老人に譲り、教師には従い、ビルマ芸能を愛する点ではひけをとらないと、反駁する。外国文

化をビルマ的土壤でほどよく開花させたティーダーピョンは、テインペーミンの唱え続けた伝統と革新の融合する新しい人間像をも象徴した。

一方バチュンは、民衆からも差別され抑圧される職業を敢えて選んだ豪胆さと、それにもとづく複雑な顔を持つ。読者には冒頭から予測できる彼の正体は、ミヤトウインの視点で段階的に示される。まず彼はバチュンを、世をはばかる事情を持つ奇人とみる。その職業を知った後は、差別と偏見への復讐がティーダーピョン養育に結びついたと解釈する。次にバチュンのサングラスなしの顔とティーダーピョンの相似、ティーダーピョンのバチュンへの妙に懐しい感情などから二人の血縁関係を確信。バチュンの告白によって実父と知る。

バチュンはミヤトウインに職場を見せ、その生活と意見をも語る。彼は25名の部下と墓地構内に住む。1949年より彼らはラングーン市保健部所属の清浄労働者という名の公務員となるが、世間の差別は変わらない。そこには物売りも親類縁者も訪れず、客はチップを手渡さず投げてよこす。世間の彼らへの嫌悪は死への恐怖に起因し、死体を手厚く埋葬することは人々の悲しみを鎮める手助けとなると、バチュンは考える。たとえ生者が差別しようと、彼は万人に平等に接する。死体にも悲しみにも、身分の差はないからである。

そのようなバチュンにとって、娘は夢であり生きがいであった。娘を捨てた母親が財の継承者として再び娘を獲得しようとしているのを知り、彼は親権を公に争うには不利な職業を辞す準備にかかっていた。すべてが完了する迄娘をミヤトウインに託したのであった。

バチュンは父性の権化であると同時に怒りの権化である。その怒りは、彼ら父子を捨てた妻と、その職を差別する社会に向けられる。険しい外見の内に秘められたナイーブな心、あくどい仕事に手を染めるより被差別を選ぶ正直さと誠意、しかし唯一の生きがいを奪われる恐怖による逆上が、彼を死に導き、その報われない生を閉じる。

バチュンは駅、墓、ミヤトウイン宅、死の床と姿をあらわすが、その出現は常に雨をともない、その言動はミヤトウインに「実に変わった人物ではあるまいか」という印象を与える。バチュンはティーダーピョンと並んでミヤトウインを刺激し、その意識を変える存在である。バチュンのいれた茶を飲むことを一瞬ためらっ

たほど世俗的偏見を内在させたミヤトウインも、彼の考え方を知り、墓堀り、埋葬、補修などが大工や庭師の資質をそなえる有能な労働者になされるのを見学して、被差別者の視点で事物を認識するに至る。

こうして『ティーダーピョン』は政治的背景を極力おさえ、雨季のラングーンと心情を効果的に重ねながら、大多数の人々の日常とはかけ離れた娘の数奇な運命の展開とかかわって認識を発展させる作家の物語となった。

ではこの作品がティンペーミンの過去10年といかにかかわり、いかなる問題を示したのか。

#### 4. 「批判と自己批判」をめぐって

『ティーダーピョン』の問題は第一に、上述の如くそれが同時代の6短編とはまた別の意味で、ティンペーミンが主張した「小説のあるべき姿」とはかけ離れたものとなったことである。そして第二の問題は、そうした第一の問題にふれることなく、ティンペーミンが別の側面から「自己批判」して『ティーダーピョン』を失敗作と認め、この作品をその理論と実践の矛盾を隠蔽する、いわば生贊の山羊とならしめたことにあると考えられる。

まず第一の点に関して、彼が主張した「小説のあるべき姿」を確認しておこう。労働者農民を描けという62年の発言にはすでにふれたが、<sup>(82)</sup>その後の主張をたどると、65年、彼は小説における「基盤」を重視するに至る。それは、社会、政治、経済等人間社会の事象を反映する小説の「基盤」であり、小説を書くには、意味ある「基盤」の選択、つまり社会のどの問題を扱い、解明するかが最重要だという。<sup>(83)</sup> 次に重視すべきは主要人物像であり、それは特殊な人物でなく「世間で探せば多くの人が出会う類の人々」を代表するものであるべきだと述べる。<sup>(84)</sup> 66年にはさらに、筋、構成、人物像が立派でも不十分で、その内容つまり「革命への貢献度」が重要と主張する。<sup>(85)</sup>

「基盤」「普通の人々」「革命への貢献度」に照らして『ティーダーピョン』を眺めれば、第一にそれは作家という知識人階層の問題の解明につとめたものであり、第二にそれは世間の大多数の人々と異なる特殊な人物に重要な役割を与える。

ており、第三にそれは、幾分同時代の課題に共通するものもあるが、15年余も以前のビルマ社会の問題を扱い、「革命」への貢献は薄弱である。問題の提示や解明がないものの、どこにでも見られる人物の同時代の様相を描いた彼の60年代の短編と、「革命への貢献度」においては大差ないとさえ考えられる。

まさにミヤトウインが新文学論争で直面した、理論と実践の矛盾<sup>(8)</sup> さながらの『ティーダーピヨン』の問題を棚上げして、ティンペーミンはどのように「自己批判」したのか。ボウタタウン紙は68年1月6日の連載終了後、1月15日、ティンペーミンの「ティーダーピヨンに関する文学的体験」と題する一文を掲載。1月31日には「ティーダーピヨン ティンガーの批判」を掲載した。

ティンペーミンの一文によれば『ティーダーピヨン』は、連載中から諸批判が生じていた。それらは第一に、感じはよいが従来のものと異なってピリッとしたところがなく物足りないという全体的な印象、第二に、父母の各階級の争いの中でのティーダーピヨンの行為を重点的に描くべき、あるいは「階級間の争い」をさらに入れるべきだという批判、第三に、ティーダーピヨン像は全面的に優れ、現実味がなく、また登場人物がすべて雄弁すぎるという人物像批判、第四に、父の死直後の求愛は不謹慎だという批判などであった。

彼は、「階級闘争」をさらに入れよという第二の批判に対してこう答える。マ・フラタンはビルマ最上層部を、バチュンは底辺を、作家、画家、機械工は中間層を、ティーダーピヨンは「階級」に立脚点を見い出さず、まさに足を踏み出そうとする層を象徴し、上流「階級」と下層「階級」の矛盾の中で中間層の知識人、専門家が下層の側に立つべきことをテーマに打ち出したかったという。しかし、隠亡と都市在住貧民の解放闘争をさらに入れると、筋の枠におさまらず、闘争と筋が分離する、父の死後娘の、父の「階級」に立脚した行動を描けば、その死をクライマックスとしたこの作品の勢いが消滅するなどの理由で、「階級闘争」を十分入れられなかつたという。

「階級闘争」の描写を規制する筋の「枠」とは、シナリオをもとにした新聞小説という枠<sup>(9)</sup>である。この枠ゆえに、彼は読者の興味を持続させるべく、45日間の出来事に過去をパズルのようにめこんたという。

時の流れ通り、バチュン夫婦が結ばれた1930年頃から社会的背景や人物の行動

を詳細に示せば、「階級闘争」は十分描けても冗長に流れるきらいがある。つまり「階級闘争」を描きすぎることは、作品の芸術性を破壊するゆえに妥協を迫られたというわけである。

第三の、完璧すぎるティーダーピョン像批判についても、彼は「枠」の問題を強調する。人物の発展過程を描くことを好む彼は、本来ならティーダーピョンが修道院で大戦期を過ごし、困苦のはてに成長する様を描きたかったが、45日の枠では母の「階級」から父の「階級」へ移動する以外に彼女の発展を示すことができなかつたという。

第四の、父の死直後の求愛を不謹慎とする批判にも、その必然性をおよそ次のように述べる。ティーダーピョンが母の「階級的立場」ゆえに、すぐに母を憎み父を愛するという描き方は、人間の基本的な心の営為にそぐわない。彼女が父の側に立つには、娘のために命をかけた父の死を不可欠とし、その決意固めがミヤトウインとの愛の確認であった。彼女の立脚点が定まらない冒頭の同居時点では、二人の愛が固るはずもないからである。しかし幸福な結末で結ばず、その後の葬儀まで叙述したため自然な結末となり得たという。

彼がこの作品執筆体験から導いた結論は、政治的、社会的主張なり階級性は、芸術形式の許容範囲でのみ入れることが可能であり、ゆえに「文学の内容は文学形式を規定する。しかし全く規定するというわけではない。文学形式が影響を与え返す。作家は自分が作った人物だからと言って、人物像を支配しあやつるべきではない」<sup>(8)</sup> というものであった。

その16日後の1月31日、ボウタタウン紙が掲載したティンガー<sup>(9)</sup> の批判はこのように始まる。同世代作家のティンガーは、ティンペーミンの近作『毛沢東の中国とビルマの主権』には感銘を受け、また従来から彼の文の巧みさは認めてきたものの、その小説がイデオロギー的に走りがちであるという批判も持ってきた。小説を書くことはおろか、読むことさえ絶えて久しかった彼がいつになく『ティーダーピョン』を熱心に読んだのは、前宣伝にひかれたのと、旧友の腕前を見たかったからであった。読了後、彼は従来同様のイデオロギー的片寄りを感じたが、批判の投稿を思いついたのは、ティンペーミンの「釈明」が出たためだっという。そして「釈明を読むと思わずやりとさせられ、我が大先生のいつものバランス

感覺、自問自答で自己批判する独善性が読み取れた」<sup>(80)</sup>と述べる。

彼はさらに、「釈明」は芸術性のためにイデオロギーを犠牲にしたとも読み取れるが、作品の「冒頭から結末まで（小説的に流れず）イデオロギー過剰ゆえに小説的趣きが破壊されてしまっているのを、この偉大なるペン仲間は気づかない」<sup>(81)</sup>と述べ、映画小説、連載小説などという枠は理由にならないと、追い打ちをかける。

その他具体的に、ティーダーピョンを駅で見い出す導入部とバチュンに関する部分はひきつけるが、タウンハンが途中から登場しなくなる点、タンスインとミヤトウインの会話の空虚さ、ティーダーピョンの転居とミヤトウイン訪問の場のふくらみの少なさ、ラストのあっけなさ等を欠陥にあげる。ラストについては、バチュンの死で終えず、ティーダーピョンの悲しみ、部下たちの墓守りの様子、マ・フラタンがティーダーピョンの結婚に財を贈って仏門に入り、修道尼となる様子を入れれば芸術的だと提案する。

彼はまた、椰子登りの知識を得るためにたまたま同時期に読んだ新人作家マウンマウンピュー<sup>(82)</sup>の長編『初夏霞たなびく頃』に言及する。同書は「ビルマ社会主義思想と階級の問題」をいく分入れるが食傷するほどではなく、椰子登りの「階級小説」として力強く、そのラストも「今日の社会主义」に反せず芸術的であるという。そして二作の間には一流と二流ほどの差があり、『ティーダーピョン』は以前のテインペーミンの水準に及ばないと述べる。

テインガーの批判への再釈明はない。しかしテインペーミンはその後も、「失敗作としてのティーダーピョン」に言及し続けた。69年、シナリオの筋を優先して一にテーマ、二に人物、三に筋という従来の手順を乱したことを「反省」すると共に、隠亡問題について主張したくて筋に取り入れたが、この問題を基本に筋を作つていればこれほどの困難はなかったとも述べる。<sup>(83)</sup>

さらに74年には、近代教育を受けた孤児が三人の男性と出会い誰を選ぶかという筋が先に現われ、次に、人民の側に立つべき作家の立場だとか親の愛などのテーマを入れたと語る。<sup>(84)</sup>

こうした一連のやりとりで浮上する問題は第一に、彼らの言う「階級闘争」の概念である。娘をめぐる元夫婦の積年の怨恨がらみの争いを、各々の階級的基盤

を根拠に「階級闘争」ととらえ、その描き方が足りないという批判。それに対し芸術性を損なうからこれ以上入れなかつたという自己批判。さらにはイデオロギーが満ちすぎて芸術性を損なつており、新人の作品の方が「階級闘争」をほどよく入れて芸術的だという新たな批判…。

独立ビルマにおける民族資本家と隠亡、あるいは上流階級と下層階級、または軍事政権下の椰子の元締と椰子登り、これらの争いがはたして「階級闘争」であったのか。民族資本家をも巻き込んだ民族民主革命をかけっていたティンペーミンには、そうした混同は百も承知であったと考えられはしまいか。

第二の問題は、ティーダーピョンが主人公であることを前提とした、その完璧さをめぐるやりとりである。前章で述べたように、事実上の主人公ミヤトウインの性格発展は果たされているのである。『ティーダーピョン』は「階級闘争」を描く小説ではなく、中間的作家の人生を描く、むしろ人生描写小説<sup>(55)</sup>と呼びうるものであろう。批判がティーダーピョンの人生に集中し、ミヤトウインにはほとんど言及されないのも奇妙なことである。

ティンペーミンはこうした諸批判における階級の概念の混乱、主人公像の誤てるとらえ方をよいことに、それを逆手に取った。彼はテーマと筋、完璧すぎる主人公について自己批判して見せ、様々な人々の人生の基本的人間性の描写に傾斜しがちな彼の本音の部分、その理論と実践の矛盾などから批判の眼<sup>(56)</sup>をそらすことにつかろうじて成功したと言えよう。

ところでティンペーミンには、『ティーダーピョン』執筆にあたり二つの目的があったという。それは第一にこの小説を通して社会的政治的主張を宣伝すること、第二に長編の空白で技術が後退しないよう筆を研ぎ続けることであった。<sup>(57)</sup>

作品の批判は第一の点に集中したが、ティンペーミンの真意はこの時期に長編を書いておくという第二の目的にあったのではないか。長編空白の10年余の間、書きたい思いは常にその念頭を占めていた。

たとえば64年2月、彼は民族文学賞選考委員としてこう述べる。以前我々は労働者農民の立場に立つ作品がなかなか書けなかつたが、今やこうした作品の創作が可能になっている。選考委員は自著の選考の場からは退席が許されるので、自分も応募したい。現在、過去の著作のみが出版されており、「64年には長編を

つ書こうと考えている。他にも新しい本を出そうと思う。しかし今日に至るまで日刊紙の仕事に忙殺されており、水泡に帰すかもしれない」<sup>(98)</sup>と述べる。また64年7月の50才の誕生日を迎えて記された文の末尾ではこう述べる。

「今日に至るまで私の活動とたたかいは、文学・思想領域のみならず、演壇・政治的組織活動の領域をも包括し、形態は多様であった。今後日増しに、私の活動がペンを持つ活動にのみなるよう、私のたたかいが思想・文化闘争にのみなるよう、こうした活動と私のたたかいを、私から読者に直接表現する“硬文”から、我が村の周辺の豆畠や、センダンや、バンヤン樹の休憩所や、タマリンドの茂みや、兄弟アカシアの間や、墓地の丘のダザウン樹の大木の傍から、黍の刈り株の下から、パゴダの傍の杭瀬の陰から姿を見せる私の登場人物たちが、話し、歌い、泣き、働き、感動する“軟文”もしくは文学芸術へ移行し、創作できるよう私は努めよう」。<sup>(99)</sup>

同じ64年11月には、「ボウタタウン紙を革命政府が国有化してから私は経営の責任が軽くなった。他の事情がもはや生じなければ、日々出来事を報じ見解を表明するジャーナリストの職務をさらに減らし、作家の仕事がもっとできるようになるだろう」<sup>(100)</sup>と期待する。

しかし小説に専念する状況が到来しないまま、彼は66年を迎えた。66年3月、軍基地を訪れた彼は、作家が軍の本当の姿を書かず、恋愛・アクション・ミステリー風作品にとどまっていると兵士から訴えられた。そこで彼は、兵士たちの生活を「書きたい気持が私の中にこみあげてきた。しかし私には軍隊生活の体験が十分にない。だから書く勇気がない」<sup>(101)</sup>と嘆き、今日軍は「人民の軍隊」になりつつあり、兵士はユニフォームを着た労働者農民の息子であるから、作家は、労働者農民を描くように兵士をも描くべきであり、兵士の中からも作家が出るべきだと説く。

66年10月には文学賞選考委員として、多くの本を読み批評する仕事と創作の両立の困難さを訴える。<sup>(102)</sup> 11月、短編選集の序で彼は、32年間にわずか24篇とは遺憾であるが、書けなかったのはジャーナリストの仕事や、政治活動のためであり、「短編を集中的に書いていられればどんなによかろう。しかし当面は、文学界に身を置き文学が創作できる状況作りに努めねばなるまい。今に至るまで容易でな

い」が、その状況は「近づいていると信じる」と述べる。<sup>(103)</sup>

64年の執筆宣言にもかかわらず彼が小説に専念できなかつたのは、いかに「人民の軍隊」と持ち上げようと、生産の停滞に経済政策の修正を迫られ、肥大化する官僚機構を培養しつつファッショ的体質を露呈してゆく軍政から、彼の「理想社会」が日増しに遠ざかり、ジャーナリストの使命未だ終わらずと考えられたからではなかろうか。

軍事政権下のビルマでは、ティンペーミンが書くべきだと主張した文学に一見類するものは多数出現していた。<sup>(104)</sup> ティンガーがふれた「初夏霞たなびく頃」もそのひとつである。ティンペーミンはこれを、『ティーダーピョン』執筆以前の67年8月にすでに読んでいる。彼は同書を椰子登り関係の書物の中で最良のもので、労働内容と生活、社会とのかかわりと労働者の苦しみなどがリアルに描かれ、文体は未熟だが小説としての出来はよいと評価。ただ、主張が物語から浮き上がり、主人公が現実離れして脇役の方が生きている点は批判している。<sup>(105)</sup>

「社会主義建設」に貢献する小説が多数登場したこの時代に、長老作家ティンペーミンが同時代を背景として書くならば、それをしのぐ長編となることが要求されたであろう。しかし同時代を描く短編は、彼の内なる声と体制との矛盾を取りしたものであった。こうした小品の延長線上に立つ長編執筆への自己規制の結果、苦肉の策として『ティーダーピョン』は書かれたのではなかろうか。そこで彼は、15年余も以前のビルマを舞台に、大戦後の混乱期には珍らしくない特異な人々の特異なエピソードをおりませて、弱者の立場に立つ中間的人物を描くことに努めたのであった。

## 5. 『海の旅人と真珠姫』と紀行

『海の旅人と真珠姫』は、『ティーダーピョン』連載終了一年後にボウタタウン紙に連載された。ティンペーミンの長編着手としては、いつにない早さである。<sup>(106)</sup> 『ティーダーピョン』とは形式も内容も全く異なる『海の旅人と真珠姫』執筆は、『ティーダーピョン』の波紋への答だったのであろうか。

同時代を背景にした『海の旅人と真珠姫』は、「科学小説」とも銘打たれる。<sup>(107)</sup>

テインペーミンの科学的関心が明白にうかがえるのは、1967年2月の発言であった。彼は、政府、党、労働者人民すべてに、現在必要とされる意識の変革は、生産手段の私有廃止と機械化によってのみ可能で、それに従事する人民の育成に科学者が貢献することが重要だと説く。<sup>(108)</sup>

彼はまた、科学者と文学者の協力にも関心を示し、広範な読者を科学的に啓蒙する楽しい読み物としての「科学小説」の必要性を認識する。<sup>(109)</sup> そして同年4月には、内外の空想科学小説の非現実的側面を冷静に見つめ、批判的に摂取するよう主張した。<sup>(110)</sup>

『ティーダーピヨン』連載以前から彼の念頭にあった「正しい科学小説」を、執筆にかりたてた要素は「海」であった。海を見たいと思い続けて成長した彼は、長じて諸外国へ旅するようになったが、海を見ぬまま一生を終える大多数のビルマ人同様、海に関する知識が希薄であることを痛感、海を書きたいと考えるに至る。<sup>(111)</sup>

彼はすでに1954年、この小説の舞台となるメルギー諸島を訪れ、金を求めてこの地に来た地質学教授による古代文化・民族の発見といった筋の小説執筆意欲にかられている。しかしそれは小説に至らず、紀行として執筆された。<sup>(112)</sup>

67年11月、「文学者の日」の講演で彼は再びメルギーを訪れた。小舟に乗りこんだサロン族の娘の籠に文芸誌を見い出し、この有能な海洋民族の過去と現在に思いを馳せ、小説の筋を考えるが、「手はともなわず、紀行小説となり得なかつた」と述べる。<sup>(113)</sup>

68年3月の研究討論会海洋学分科会に参加した彼は海への関心をさらにかきたてられ、同年11月12月にかけ、メルギー諸島への海洋調査船に便乗する。『海の旅人と真珠姫』は、この経験を下敷に書かれたものであった。

ゆえにこの作品は、科学小説であると共に「紀行小説」とも銘打たれる。<sup>(114)</sup> 新たな長編の執筆は、科学小説の必要性と「海」との結びつきに、彼が多く手がけた紀行の手法を導入することによって可能となった。

テインペーミンの紀行の特徴は第一に、叙述の対象が政治、地理、歴史、文化、生活、人々の心など広範囲にわたるという多様性である。<sup>(115)</sup>

第二に、語り手たる作者を取り巻く人物の描写や生き生きした会話など、小説

の手法を活用した芸術性である。<sup>(116)</sup>

第三に、明快かつ適格な<sup>(117)</sup>表現にみられるジャーナリスト的切れ味である。

そうした特徴を具えながらも、国外紀行と国内紀行は各々異なった意義を持つ。前者には『友好の旅人』(1962)と『東を眺めつつ西に行く』(1962)がある。<sup>(118)</sup> それらは、資本主義国の物質文明と民族意識の低下、社会主义国の優位性を説く点で、ビルマ「社会主义建設」への教訓を読者に与える啓蒙書としての性格を持つ。

たとえば、左翼から批判が続出した61年9月の訪米について、彼は「印刷出版観察は口実であり、アメリカ資本主義の実態を真近に見るため」<sup>(119)</sup>の旅行だと述べ、アメリカ社会の光と影、車社会の事故や公害、クレジットで新商品へ買い換えずにいられない民衆、金さえあれば快適な消費文化を描き、あるいはハワイでビルマ服を着た彼に、国はどこか、自国語はあるかと問う白人に憤り、言葉を奪われぬビルマ人の誇りをあらたにする。

また61年5月日本では、日本人民と友好的交流ができるのは、ファシスト日本にビルマ人民が抵抗・決起したためだと述べて進歩的作家らと親交を結び、西洋化した東京文化や物価高にも言及する。

一方中国から陸路入ったベトナム民主共和国では、化粧気のない中国女性に比べベトナム女性の装いに感嘆し、ビルマの風景との類似に懐かしさをおぼえ、ベトナム作家の保障された生活を羨望し、その予想を越える発展ぶりを賞讃する。

外国の現状からビルマの進むべき道を照射する国外紀行に比べ、国内紀行はさらに政治的使命を与えられる。彼の国内旅行の目的は62年以前は選挙活動、組織活動、以後にあっては、講演や勤労奉仕などであった。彼は地方の民衆の状況を学び、彼らに自己の主張を伝え、さらに広範な読者にその体験を伝える。その意味で国内紀行は、最も「ビルマ社会主义」に貢献すべきジャンルとなるはずであった。しかしその内容は68年にかけて次第に変化してゆく。

60年2月の選挙体験を語る中で、民衆の政治的無関心、その現実主義的したたかさ、あるいは民衆と知識人の遊離を描いた『敗北の中の微笑』<sup>(120)</sup>に比べ、同じく故郷ブダリンの62年12月を描く『革命政権下のブダリンをゆく』<sup>(121)</sup>は、共同作業の中で心を開く農民たちとの語らいの中から、軍の合理的指揮系統を活用して

農民の利益を重視する「公正で清潔なビルマ社会主義」の息吹と農民の期待感を伝えて、楽観性に満ちる。

また63年末の旅行を記録した「学ぶ旅人」<sup>(122)</sup>では、一部に軍の専横、買占め、不正があることを指摘しながらも、メイティラの協同組合の創設と活況、シャン州における軍の「控え目」な行政指導と労働者農民への「献身」を強調する。

しかし64年の、文学的先駆者の足取りをしのぶブダリン旅行では、楽ではない先人の子孫たちの生活、円滑でない協同組合運営、闇に生産物を流さざるを得ない困難に言及する。<sup>(123)</sup>

66年のブダリン旅行では、『ストライキ学生』時代の風景<sup>(124)</sup>を懐古し、教育設備改善を喜びながらも「今回のブダリン訪問では意気をそがれるような話をたくさん見聞した」<sup>(125)</sup>と漏らす。それは、ピーナッツ、ゴマの産地にもかかわらず油不足、布を至急織って納入しても2年間にロンダー一着分の支給、闇商売の隆盛、官僚機構の内紛、妾を置く役人など「『革命政権下のブタリン』という文を書いた当時（1962）のようなわけにはいかない」<sup>(126)</sup>状況であった。そして彼は、政治に期待せず黙々と働き続ける農民の姿にむしろ励まされる。

一方、ビルマ本州で矛盾を露呈する「革命」も、ビルマの暗黒部といわれる山岳地帯の開化には十分な意義を持つととらえられた。66年3月のチン特別区訪問の記録『チン特別区の歴史の始まり』<sup>(127)</sup>で彼は、その景観、動植物、婚姻などの風習、反英反植民地闘争の系譜などの叙述の合間に、厳しい自然環境の中で行政の中心となるチン族退役軍人の献身やビルマ族派遣官吏との協力、開化の鍵となる道路建設と教育への熱意にふれる。

その結果彼は、この地に基本的に残存する集団労働の生活習慣に、時代変革科学的社会主義の集団主義を導入すれば飛躍的前進が生じ、原始共産制、奴隸制、封建制、資本主義、社会主义の5段階を一挙に飛び越えて新しい社会へと至る可能性が生じると説く<sup>(128)</sup>に至る。

「時代変革科学的社会主義」は軍の強権によっても到達可能な、彼の理想であるはずだった。しかし、複雑な問題の山積に対応しうる柔軟性を欠き、腐敗を温存しつつ硬直の度を増して、権力維持につとめる「暴力装置」の「誠意」と「献身」への讃美は、次第に彼の紀行から姿を消していった。かわって強調されるも

のは、民衆の誠意と献身であった。

68年1月、彼は上ビルマの米不足と闇市に失望する反面、民衆が工夫して勤勉に働く様に感銘を受け、未来に希望を託す。<sup>(129)</sup> 2月には、道路建設の重要性やそれに従事する人々の苦労、最大の問題としての建設資材不足を語る。<sup>(130)</sup> その国内紀行は、民衆生活の中から「ビルマ社会主義」への問い合わせを発するものへと変わりつつあった。

そのような時期に書かれた『海の旅人と真珠姫』は、作者が一人称の語り手として登場人物につらなり、旅の出発から帰還を時の流れに沿って叙述する点で、彼の従来の紀行に通じる形式を持つ。しかし、「ビルマ社会主義」への問い合わせは少なく、むしろ科学的啓蒙的要素の凌駕が、新たな特徴となっている。

海の旅は次のように始まった。1967年、メルギーへ講演に出かけた「私」は、ファンを自称するタキン・グエアウンから漁船提供の申し出を受ける。「私」は同行研究者を募って海洋調査隊を結成。海軍に刺激を与えない、研究成果を提出するなどの条件を示して政府の許可を得、海の風いだ68年11月末に出発する。同行者は、在野の動物学、植物学、地質学、人類学者を中心とし、タキン・グエアウン、その従弟の息子タンスイン、乗組員など約20名であった。

中でも重点的に描かれる人物は、タキン・グエアウンとタンスインである。タキン・グエアウンは、反英独立闘争の闘士であったが、戦後左翼の分裂で政治に見切りをつけ、海洋事業を手広く営んできた60すぎの頑健な男で、テインペーミンの『現代の悪魔』を読んで以来、彼を尊敬している。民族主義、左翼の統一、経済的自立など作者の思想的影響下にある人物のひとりとして描かれる。

タキン・グエアウンが我が子同然に育てたタンスインは、読書好きの大卒失業者で、恋人である通称「真珠姫」との結婚を反対され、彼女の失踪以来空虚の日々を過ごし、その捜索のため旅行に参加した。タイ人と共同で魚の密輸をする富裕なアラブ系ビルマ人の父とサロン族の母を持つ美女「真珠姫」一族は、摘発を受けて2年前に消息を断っていた。

『海の旅人と真珠姫』は、68年11月から12月にわたる調査旅行の経過をもとに、メルギー諸島の地形、気象、生物の生態、居住するサロン族、カレン族、彼らと結婚したビルマ族の生活、あるいは各研究者の披瀝する科学的知識などを描く記

録的部分に、タンスインの恋人探しという虚構部分を重ねた41章から成る。登場人物中、タキン・グエアウンやタンスイン以外の同行者は、名前と容貌などを変えた実在の人物で、記録的部分はすべて事実であったという。<sup>(131)</sup>

ティンペーミンによればこの作品の狙いは、海洋学を中心に、物理、化学、気象、天文、植物、動物学的知識を与え、読者が科学的なものの見方を身につけることにあった。<sup>(132)</sup> それだけの狙いであれば、記録的部分だけでも十分であろうが、虚構を重ねることで文学愛好者にも読みやすい作品となったことはたしかであった。

虚構部分で重要な役割を与えられるのは、タンスインの性格である。彼は潔癖で自閉的であり、古典文学への親しみがその空想癖に拍車をかける。「私」は彼に興味を持ち、次第に彼の心を開いて真珠姫との顛末を聞き出し、そのひたむきさとロマンチストぶりに腹立たしさといしさと哀れさを味わいつつ、彼の捜索を見守る。

この作品の小説的特徴はタンスインが空想から科学へ、夢から現実に目覚めて「人格の発展」を成就することにある。彼が現実に目覚める第一の事件は、18章から22章にかけて叙述されるジュゴンの発見と捕獲である。古典文学にも登場する人魚の存在を信じていた彼は、事件後発熱し、幾分たくましく磊落になる。

第二の事件は36章から38章にかけて叙述される「真珠姫」発見と別れである。彼女は1年半前に島の小学校教師と結婚し、乳児がいた。授乳中の彼女を見い出したタンスインは、一瞬彼女と見つめあうがやがて無言で踵を返す。息詰まる再会の後も「真珠姫」の釈明は叙述されず、夫が好人物で教育に情熱があり、父はタイ領に逃れ、母はサロン族首長として漂流生活を続けながら時々娘と会っていることなどが、近隣からの情報として伝えられる。

人物の人格発展を含め、この小説はティンペーミンのいうテーマ、人物、筋という三要素を順序よく充たし、彼にとっても満足の出来だったという<sup>(133)</sup> たしかに過度の空想癖を持つ若者が、ビルマで最も未開といわれるサロン族や、ビルマ社会に不可欠な恥部である密輸にかかる苦悩を具現した美女を捜索する物語は、単調に流れがちな紀行に色彩を添える。

しかしこの若者と娘は、ビルマの普通の労働者農民を代表するものではない。

その意味で彼等の特異性は、『ティーダーピョン』の人物のそれに通じるのであつた。しかも、『海の旅人と真珠姫』には、テインペーミンが『ティーダーピョン』で自己批判までしてみせた「階級」の問題がほとんどあらわれない。それにとってかわるもののが「科学」であった。だが、民衆の現実認識と変革の手段としての科学の必要性の強調は、より厳しい「現実」から目をそらせる結果となりはしなかつたか。

『ティーダーピョン』執筆後から早くこの新たな小説が執筆されたのは、紀行という手慣れたジャンルに虚構を重ねるという技術的容易さのゆえであった。しかしそこには、ある「事情」が潜んでいた。それはこの「小説」が、当初小説でなく紀行として書かれたという事情である。

メルギーへの調査旅行は、タキン・グエアウンという善意の人の尽力で実現したのではなく、大学教授や専門家が海軍の調査船で出かけた調査に、大学中央評議会の一員としてテインペーミンが同行したためであった。彼が船上で紀行を書き始めたことを海軍当局に報告したところ、調査船の活動を余人に知らしめることは軍規に反するという理由で、執筆を差し止められたという。「そこで困ってしまった。私が書いたものを処分すべきか。この内容と文体を何らかの方法で読者に伝えねばならない。それなら小説にしなければ、ということで小説に変えたのです」<sup>(134)</sup>と、彼は74年7月述べている。

長編執筆を長年切望しながら果たせず、努力のはてに書きあげた長編は「不評」で、急拵紀行から改変した長編が「満足する出来」だったとは皮肉である。しかしその後テインペーミンは、二度と紀行小説を書かなかった。

### おわりに

『ティーダーピョン』は、「主人公」が修道院育ちにもかかわらずビルマ的であることや、職業に貴賤なしという「主張」が評価され、<sup>(135)</sup>68年度民族文学賞第4位を獲得した。一方『海の旅人と真珠姫』は、大学文学部教科書に指定された。両者はともに、描かれない苛酷な事実が虚構を圧倒する時代の妥協の産物でありながら、またそうであるからこそ、権力から応分の評価を受けたといえよう。

二作は一人称小説という形式的共通性を持つ。<sup>(136)</sup> しかも同じ一人称小説であつた前作『東より日出するが如く』が、語り手に生じた事件についての語り手自身の行動を描いたのに対し、『ティーダーピョン』、『海の旅人と真珠姫』は共に、他者に生じた事件についての他者の行動を、語り手が観察しつつ描く部分が大きな位置を占める。それは、傍観し観察せざるを得ない等身大の自己への認識が、テインペーミンの心の中で育ちつつあったことを物語るのではなかろうか。

軍事政権への協力を主張しつつ、個としての人間性回帰を発信するという二律背反がテインペーミンに内在したのと同様、同時代の文学界全体が、ある矛盾をかかえていた。それは、厳しい検閲によって「社会主義建設」に貢献する文学の嚴選がはかられる一方で、それをしのぐ低俗娯楽作品の出版が許可され続けたという矛盾であった。

独裁政権下の「左翼」知識人にとっては、テインペーミンのように体制に協力しながら「理想社会」をめざすか、それとも反体制を貫き投獄出獄をくりかえすか、あるいは貝のように口を閉ざすかの三つの道しか残されていないかにみえた。しかしテインペーミンの58-68年が示したように、いずれの道もが創作への「専念」からほど遠い位置にあった。

一方、いつの時代においても最大の犠牲者であった民衆の困窮は、知識人の精神世界の苦悩の比ではない。少なからぬ「左翼」知識人・学生が地下勢力に抱いた「幻想」は、そうした民衆の苦しみ・不満の反映でもあった。経済破綻による貧困の平等化によって、作家たちが民衆と感慨を共有し、文学界で日常回帰が翼賛にとってかわるには、いましばらくの時の経過が必要であった。

その意味でもテインペーミンは、時代にとって「早すぎた作家」であったのかもしれない。彼のかかえた矛盾は、やがていつの時代にか統一されるべきものであった。理想社会と、個としての多様な人間性は対立しないという意味において。

(1993. 1. 31)

#### 註

- (1) J-13 P. 53-73参照。彼の50年から57年の著作の内容は1. 40年代の総括 2. 社会主義大国への憧憬 3. 世界平和と国内和平 4. 伝統と革新の合一した新し

い文学芸術の創造 5. 国内地方紀行に大別されたが、うち1は、その8年間で総括を終了し、2と3と共にその期間に再開した政治活動に解消された。

- (2) テインペーミンがボウタタウン紙に毎日執筆した論説は膨大な量にのぼるが、本稿は後に著書に収録されたものを中心としている。
- (3) AFPFLは4月、後に清廉派を称するウー・ヌ、タキン・ティンらと、後に安定派を称するウー・バスエ、ウー・チョーニエインらの二派に分裂。B-1 (P.127-142)によれば、5月ウー・ヌはNUF幹部を招き、中立・民主主義・和平・民族友好を公約して支持を要請。NUF議長団は支持を決定した。6月国会でウー・バスエ提出の内閣不信任案はNUFの協力で否決。しかし7月NUFのウー・エーマウンが入閣し、ウー・ヌのブレインになったことでNUF左派の批判が激化。アウンタンはミャタンティンらと民族進歩党を結成し、右派に対抗。9月青年隊がNUFから除名。アウンタンら左派は、ウー・ヌもチョーニエインも反共であり、AFPFL分裂を個人的怨恨によるとみたが、ティンペーミン、ボウ・ミヤトウエー、タキン・チッマウン、ウー・バニエインら右派はウー・ヌの左翼への好意を評価したという。
- (4) 武装解除を条件とするこの恩赦令は、6月国会のNUFの協力に対する見返りであった。B-1 (P.132-133)によればウー・ヌはNUFに反政府軍投降呼びかけを要請。ティンペーミンらは歓迎したが左派は反対したという。
- (5) B-3 P.70-71。48年問題等についてはJ-13 P.58-63でも若干ふれた。
- (6) 彼は、志を同じくする人々の出資を受けて自己の政治路線実現のため新聞社を創設し、自分の嫌いな経済活動をすることによって自分の好きな政治活動をおこなったと述べる（「国有化と私」1964. 9. 12, B-21, P.503-506 所収）。また、紙名の由来はボウタタウン地区に社屋があることにもよるが、ボウタタウン=Vanguard=前衛という意味から、ビルマの進歩に影響を与え、ビルマ独立堅持、民主主義の存続発展、社会主義の前衛となるよう願いがこめられた（「移転」1965. 1. 16, B-21, P.506-510 所収）。なお（）内の年月日はボウタタウン掲載論説の末尾に付されたもの。
- (7) B-21 (P.510-514 「国有化一周年」1965. 9. 10.)によればNUF支持者を基盤に設立されたものの同紙の地下勢力への厳しい態度でNUF支持層から十分な支援を受けられなかったという。またB-3 P.46によれば発行部数は常時3,000部を切

り、B-21 (P.506-514 「移転」) によれば電気、電話代、給与の支払いが危ぶまれることもしばしばで、ティンペーミンは他紙の稿料をもつぎこんだという。

(8) B-3 P.46

(9) 過去の怨恨を捨て、大赦による和平、独立以来崩壊した民族統一の再建、合憲新国家建設というNUFの路線に基づく主張であった「敗北の中の微笑」(B-12 P.372)。

(10) B-1 P.257

(11) たとえばティンペーミンは軍の経済活動をブルジョア的と批判。連邦党が国軍福祉共済会 (DSI) に厳しい態度を取ったことを歓迎し、61年12月のPCP第三回協議会で連邦党との協力を説き、軍の再クーデターの可能性の指摘にも楽観的であったという (B-3 P.72-73)。

(12) 連邦党が1月27日タキン派とボウ・派に分裂する前日の「私の与えた40票」(ボウタウン紙1962. 1. 26, B-33, P. 3, P.14)

(13) 後者 (1961. 9-62. 1ボウ紙連載62年出版) は本稿の5. で少しふれる。前者 (1960年12月連載終了61年出版) はJ-5でも扱ったが、政敵で竹馬の友チョーニエインとの交友を独立、抗日闘争期からAFPFL分裂期まで回顧する。共産主義イコール全体主義と見て「雪どけ」後も社会主義国を警戒するチョーニエインと、ティンペーミンの樂觀性、ウー・ヌの動搖性に疑心暗鬼のチョーニエインと、ティンペーミンの柔軟性、二人の一一致点は工業振興だけといったやりとりが続く独特の記録文学である。

(14) J-7 参照。

(15) 革命評議会広報局が漫画家を招いて民族精神を高める作品を書くよう依頼したこと支持 (『漫画革命』1962. 3. 25, B-21, P.236-239)。作家協会執行委との会見で広報局ソーミン大佐が労働者農民を書くよう依頼したこと支持 (『ソーミン大佐から作家へ』1962. 4. 11, B-21, P.276-278)。政府広報誌『前進』二号の水準が高いと賞讃 (『前進二号』1962. 6. 4, B-21, P.114-116)。

(16) B-1 P.271

(17) PCPのたび重なる戒告にもかかわらず、彼が党内論議で解決すべき意見の相違を党外の新聞に書き続け、61年12月の同党第三回中央委員会が民主集中制への従属を求めたところ、従えないので離党するとの書面が届けられ承認されたという。意見の

相違とはたとえば、PCPは安定派AFPFLのみを敵視し、ティンペーミンは清廉・安定両派共に同じ階級基盤とみたこと、PCPは48年反乱を正しいと考え、ティンペーミンはPVOは正しいがBCPは誤っておりその極左偏向を人民に知らしむべきだととらえたことなどだという（B-3 P.70-71）。なおBCP離党に関してはJ-13 P.59参照

- (18) B-3 (P.44) は、ティンペーミンが入った組織は次々分裂するが、彼がBSPPに入らないのは同党にとって幸運だと63年8月15日現在述べる。又、革命評議会への評価はPCPとティンペーミンの間で一致しており、彼はクーデター直後には憲法と議会廃止に反対したという。PCPを廢してBSPPに統合させるか否かについてもPCPを存続して戦線を作ることを主張したという（B-3 P.71-72）。
- (19) 「国有化と私」1964. 9. 12, B-21, P.505。  
ティンペーミンがBSPP党員であったことは家族から筆者への私信、追悼集の証言（サヤウン・サンタウン「ティンペーミンまたは粘り強い勤勉者」B-5 P.353）からその死後知るところとなったが、勤労奉仕や地域活動への積極的な参加（「町で愛される人物から議長に」1965. 7. 26, B-21, P.128-133）や友人の作家ニャーナの入党歓迎（「ウー・ニャーナ計画党へ」1965. 4. 3, B-21, P.304-308）などから推測される。また62年より彼は革命評議会文化評議会委員、大学中央評議会委員その他美術評議会議長や文学賞選考委員をつとめたが、その党員としての活動内容を明らかにする資料は未入手。
- (20) J-13 P.90-91
- (21) B-3 P.18-32が典型的
- (22) その前身であるビルマ独立義勇軍に対してもティンペーミンはファシストの第五列ととらえず「人民の軍隊」となる可能性を主張してきた（J-12 P.112-117）。
- (23) 彼は1941年、日本軍特務機関の援助で設立されたという人民革命党に抗日宣伝のために入党（J-12 P.108）。
- (24) 「スト破りの人物の本を出したミヤワディ」（1964. 5. 8, B-21, P.553）。1300年闘争は1938-39年に生じた反植民地大衆闘争。62年以来の「革命」には1300年闘争におけるような民衆の意志のうねりが全く働いていないことにティンペーミンはふれていない。

- (25) 50年代初期中緬友好に積極的だったティンペーミンも、BCP代表を北京に駐在させ BCP支援を続ける中共への思いは複雑であったことは想像にかたくないが、中ソ論争による両国の非同盟諸国左翼抱きこみ攻勢の一環として、彼とソビエト大使館の親密な関係が生じたことは不思議ではない。E-1 P.95はボウタタウン紙がソビエト大使館の援助で創設されたと述べ、B-28 P.80-84は、ビルマ左翼の大物が大使館に新聞社設立の援助を乞い、数カ月後ボウタタウン紙が発刊されたというソビエト人元情報部員の告白の一部を引用する。ティンペーミン自身の釈明はない。ソビエト側の資料発掘が期待される。なお、68年のソビエト軍チェコ侵略についても彼は、国家の運命を最終的に決めるのはチェコ国民自身と述べつつも「自由化による反革命の危険性」を認めている（「二政治局会見」（ボウタタウン紙 1968. 7. 24, B-36, P. 3）。
- (26) 経過は『出版評議会とボウタタウンの論争』（1963出版 B-21 P.436-490 所収）に詳しい。ボウ紙が決定に従わなかったのは同紙はもともと広告掲載が少いゆえに頁数も少なく縮小不要との判断に至ったからという。すでに63年4月7日の新聞記者協会大会で政府との不和は公然化し、出版評議会は政府記者会見の廃止や紙、印刷機の人民財産委員会による配給に反対した。ティンペーミンは、マスコミによる政府のアラ探し、外国へ政府に不利な情報の流出、外国の介入なども杞憂して記者会見を廃止した政府を支持。ウー・ヌ時代特ダネあさりで記事の奴隸となった記者たちの「自由競争」の退廃、そこから尊かれたマスコミと政界の癒着を批判。ネタの少なさを嘆く記者たちに労働者農民関係のネタは尽きないと反論。「革命を支持する者に民主主義は広く、支持しない者には狭い」というネーヴィン将軍の言葉を引用して、我々が独立後獲得したのは上流層のみを潤す議会制民主主義であり出版評議会の求める自由は資本主義的民主主義の権利だと批判した。
- (27) 「バモー・ティンアウンの灯火、花火」(1962. 11. 26, B-21, P.279) によれば、抗日小説『山地の闘争』（1963）などの作者バモー・ティンアウン（1920- ）は、48年の独立を否定。植民地以来ビルマ文学に全く進歩はなく、ティンペーミンの思想はプチブル的で18世紀の芸術至上主義に通じると批判。それに対してティンペーミンは政治問題を入れないという申し合わせを破ったと批判した。また作家組織は58年作家協会が分裂し、同協会の他に60年作家文学クラブ結成、65年民族統一防衛

法により両組織共に解散。「文学界に新しい歴史が始まる」(Ngwetayi 1967. 1, B-21, P.328-334)によれば66年12月1日ビルマ連邦文学労働者協会結成委員会（議長ウー・ウン、書記長ウー・ティンヂー）結成。全作家を包括する組織作りに動き出した。

- (28) B-3 P. 1によれば彼は、「和平の破壊者という呼称は認めない。和平についてもっと自由に書きたい。私を必要とせぬ人々の意思に従う」と述べたという。なお、政府は63年6月11日和平会談提案、8月20日CPBとの交渉決裂、11月14日BCPを含む民族民主統一戦線(DNUF)と決裂、12月18日シャン反乱軍と決裂、同日64年1月31日を期限とする恩赦令発令。
- (29) B-28. 反植民地小説『死すとも合わじ』(1964)などの作者ヤンゴン・バスエ(1918-)と、63年2月右寄りとして解任されたウンヂー元准将との結びつきを強調する記事をボウタタウン紙が掲載したことへの反論。
- (30) 『交渉の内外』B-14。6月13日から11月13日にかけてボウタタウン紙に掲載された25文から成る。ティンペーミンの他ボウ・ティンリン、チャンエー、コウ・バタン(チミンダイン)など三名も執筆するが大半がティンペーミンによるもの。
- (31) 「国民とチエーモンの国有拒否」(1964. 9. 10, B-21, P.499-503)。ボウタタウン紙の国有を喜ぶと共に、チエーモン紙国有に関して作家トーダースエが、芸術家はもともと国民の金で養われているからすでに国有化(ビルマ語の「国有」は「国民所有」「人民所有」なる語をあてる)されていると述べたことに対し、ティンペーミンは労働者農民の立場に立つ政府が所有するメディアで、作家が労働者農民の立場で書くことが国有の真の意味だと述べる。
- (32) 「扇動頭脳労働者」(1964. 11. 27, B-21, P.301-303) J-7 P.35, 64年の項に加筆されたい。
- (33) 「相互批判論議」(1966. 1. 31, B-21, P.514-518) J-7 P.36, 66年の項に加筆されたい。
- (34) 62年7月ラングーン大学では軍事政権による活動規制に反対して自治を要求する学生運動が激化。警官隊軍隊の出動で7月8日学生自治会の建物爆破、学生数十名から一説によれば数百名死亡。大学は休校。また63年の和平交渉決裂後も学生多数逮捕、文・理・社会科学の三学部閉鎖。

- (35) 「人民の誠意と両親の誠意を知れ」(1962. 10. 7, B-26, P. 1-5)
- (36) 「ラングーン大学からの二つの喜ばしい知らせ」(1963. 2. 16, B-26, P. 6-11)
- (37) 「大学界のよき伝統」(1963. 12. 1, B-26, P. 28-31)
- (38) こうした意見は1962年から70年にかけての評論48篇所収の選集『教育評論』B-26 参照。
- (39) 「児童文学討論会」(1965. 9. 21, B-21, P. 239-242)、「新しいものを建設中に発見された歴史的な古いもの」(1966. 5. 20, B-21, P. 575-577)、「ウェタリからサンスクリット語碑文」(1966. 7. 2, B-21, P. 561-563)、「ビルマ史研究が一気に前進」(1967. 3. 23, B-21, P. 578-581)
- (40) 「ビルマ語ビルマ文学と独立闘争」(1967. 1. 1, B-21, P. 416-420)
- (41) 「類似点を強調すること」(1967. 2. 11, B-21, P. 421-424) 純粹なビルマ族は50%ゆえビルマ語は公用語となり得ないという意見に対し、民族数を詳細に示し、民族間の相違のみ強調することは建設的ではないと反論。
- (42) 「大学教師コンテスト」(1965. 7. 7, B-26, P. 113-117)、「英語教育方法改革」(1964. 8. 26, B-26, P. 49-53),「ビルマ語教育を目標とする時に英語で落ちただけで不合格とすべきか」(1966. 6. 15, B-26, P. 187-192)、B-21, P. 378-424「言語」の項も参照。
- (43) 中国文革の影響で毛バッヂをつけた華僑子弟に67年6月19日バッヂ禁止令発令、6月22日より中国人学生の抗議デモはじめ反政府運動、6月26日中国人学生とビルマ人学生衝突、群衆の中国人街放火、死者43人、軍警察出動、6月27日ラングーン戒厳令発令などの一連の事件。
- (44) 毛個人崇拜によって世界革命の中核を自認するに至った中共が、その革命理論と実践の矛盾ゆえに指導者層の分裂・権力闘争を生み、党内闘争の限界が党外闘争としての文革に至ったと分析。それがビルマの毛バッヂ事件、BCPを媒介とする革命の輸出に帰結したと主張。B-19参照。なお外務省南西アジア局1967年10月発行の全訳がある。
- (45) J-9参照。ただし、著書に収められなかった膨大な著作を合わせれば、「はじめに」で指摘したように、著作の大半は文学関係以外のもので占められる。
- (46) J-13, P. 68-70。

- (47) 1958年8月31日作家協会大会における会長挨拶（B-21, P.28-36）。例として長編『媚薬』（1935）などの作者ニヤーナ（1902-69, 本稿註(19)も参照）、長編『金の愛銀の愛』（1947）などの作者ティンデー（1916- ）、バモー・ティンアウン（註(27)参照）をあげ、最もすぐれた作家として監獄小説『風とともに』（1957）などの作者ルードゥ・ウー・フラ（1910-82）をあげる。
- (48) 平々凡々な民衆生活に題材は尽きせぬほど多いゆえ新奇な題材を求めることがかれという1956年の主張を発展させたものと考えられる。J-13, P.70参照。
- (49) B-21, P.56, 61年12月31日のラングーン大学ベンクラブの講演会での発言。
- (50) B-21, P.274, 註(15)参照
- (51) 歌、劇、映画、ラジオ、テレビ、美術の発展は文学の発展に依拠しているがゆえに、文学の発展は民族文化の幹だと述べる（「民族文学会議歓迎」1962. 11. 9, B-21, P.282）。63年度芸術文学賞選考にあたり賞金がアップしたことについて、長編は現代文学の母、国民への影響が大きいので賞金も多いと述べる（「芸術文学賞」1964. 12. 2, B-21, P.203-204）。
- (52) ビルマ社会主義による非資本主義的発展の進行過程では、資本主義に経済的に妥協しても思想的に妥協してはならず、思想闘争の方法として個別の作品を通して啓蒙すると同時に権力が上から指導すべきだと説く（「思想、文化の領域で手控えてはいけない」Atwe hnit Aye 1966. 7, B-21, P.130-135）。
- (53) 「新聞記者と権力」（1966. 8. 9, B-21, P.518-522）。
- (54) 「文を書くこと、解放」（Ngwetayi 1966. 9, B-21, P.334-341）、「すべての人々の繁栄のために作家とは」（Ngwetayi 1966. 8 P.22-24）。これらは、美術評議会議長としてのティンペーミンの挨拶が一部ジャーナリズムに歪曲して報道された結果生じた論争といわれる。
- (55) 「民族文学賞」（1966. 11. 30, B-21, P.210）。1948年設置されたサーペーベイマン賞は1962年より芸術文学賞、65年から民族文学賞と改称。また、信念がなくともビルマ社会主義を礼讃すれば受賞可能という意見に対しても、信念があろうが半信半疑あろうが崇高な目的で書けるのは成果であり、さらに上質の文学をめざすには信念が必要と述べる（B-21 同上P.208）。
- (56) 「芸術文学賞」1964. 12. 2, B-21, P.203, 206。

- (57) 「文学文化批評で注意すべき諸点」(Atwe hnit Aye 1966. 9, B-32, P. 8)
- (58) 67年1月22日労働者人民日報紙でヌウエティックがティパン・マウン・ワ (1899-1942) の『戦時の記録』とティンペーミンの『戦時の旅人』を比較して前者の方が文学的技法がすぐれていると評価したことへの反論（「文芸批評において何を主な指標にするか」1967. 1. 28, B-21, P. 141-153）。その中でティンペーミンは「私のようなBSPP党員」は書いてはならず、非党員こそ真実に近いことが書けるというわけだ (B-21, P. 144) と、激しく反論。党員であることを吐露している。
- (59) 「言葉が豊かで意味が浅いウー・ポンニヤ」1963. 3. 19, B-21, P. 361。宮廷劇作家ウー・ポンニヤ (1812-66) 生誕150周年祭における評価。
- (60) 同上, P. 363
- (61) 反植民地、抗日闘争、和平などに活躍した民族詩人タキン・コウドーフマイン (1876-1964) の死にあたり、彼を民族の父、和平の父、大英雄としてアウンサン同様殉難者廟に埋葬せよという主張に対し、アウンサンはビルマの反帝反封建民族民主革命の最高指導者で余人をもってかえがたい。その革命の一翼である文化革命の最長老であるコウドーフマインを革命全体の指導者にまつりあげるのは、アウンサンの役割を評価したがらない人々の考え方であり、また90近くで天寿を全うした者を烈士扱いできないと主張。暗に地下政党の主張を批判した（「タキン・コウドーフマインとは何か」1964. 7. 26, B-15, P. 223-226）。また、コウドーフマインが民族抑圧への義憤、被抑圧者への同情と愛、つまり心情から社会主義に接近したのに対し、長編『キンミンチー』(1914)などの作者レーティパンディッタ・ウー・マウンチー (1879-1939) は、社会を哲学的に批判し、時代を考察して社会主義の必然性を理性で導き出したので思想的に深いと評価する（「社会主義の勝利は必至と述べたレーティパンディッタ・ウー・マウンチー」1964. 10. 27, B-21, P. 368-372）。
- (62) 「キッサン文学という指標をくつがえす」1966. 1. 19, B-21, P. 282-286。キッサン文学を近代文学史上の指標とする傾向を批判、ティパン・マウン・ワ (註(58)参照) の評価も再検討。J-8参照。
- (63) 「前進二号」1962. 6. 4, B-21, P. 116
- (64) B-12, 出版者による「はしがき」P. 2

- (65) 「庭師」(1938), 「ある夜の出来事」(1936. 4), 「自由」(1936) などB-18に収録。J-4も参照。
- (66) 「短編小説作家ティンペーミン」(B-6, P.211-218 所収) P.213-215
- (67) J-4, J-8, J-14中巻解説参照。
- (68) テイパン・マウン・ワ(註(58)(62)参照)も晩年犬のことを書いているのを意識したティンペーミンは、「私はティパン・マウン・ワの「アーメイとルエゾー」が気に入って書いているのではない」と述べる(B-18, P.640)
- (69) 「ダバウン月の影響と老教師の問題」(1964. 2. 26, B-18, P.602)
- (70) 「生死の哲学」(1964. 7. 10, B-21, P.286)。また「タキン・コウドーフマインとは何か」(1964. 7. 26, B-15, P.226-227)でも、死体の薬品処理による永久保存や碑の建立を好まず、故人に感謝を表するならその人生や業績に学べと説く。
- (71) 「年老いたなら」Ngwtayi 1967. 6, B-21, P.359
- (72) B-18, P.616
- (73) 「多くの人々がけなす恋愛小説」(Atwe hniti Aye 1966. 2, B-17, P.257-265)
- (74) B-18, P.635
- (75) B-18, P.657
- (76) 「民族文化から植民地の影響一掃」(1965. 2. 10, B-21, P.169)でカレン族代表のくつ、ズボン、ネクタイ、アロハを批判。
- (77) 「寮の規律が緩んできた大学」(1965. 6. 1, B-26, P.87-91)
- (78) 長編『岸辺』(1950)などのタンスエ(1926-64)、『会うは別れのはじめ』(1961)などのトーダースエ(1919-) (註(31)参照)、短編集『かつては同志』(1963)などのミンシン(1929-)らと同世代とされる。
- (79) 長編『軍隊のミヤッコウコウ』(1951)などの作者タードゥ(1918-)、ティンデー(註(47)参照)らは恋愛小説作家として有名で、共に新文学論争では左翼作家に対抗して文学の芸術性を主張。
- (80) J-14, P.76-80。その他「上昇指向型」「背信型」「成熟型」に分類。
- (81) 1919年生れ。長編『清流の蓮』(1954-56)などの小説、詩、文芸評論多数。新文学論争当時ティンペーミンと共に文学の階級性を主張したが若干の論争もある。

- (82) 本稿P. 23-24
- (83) 「小説作法」 Atwe hnít Aye 1965. 11, B-21, P. 183
- (84) 同上P. 184
- (85) 「受賞作4編」 B-21, P. 216-217。66年12月、1965年度民族文学賞選考委員としての発言。
- (86) 本稿P. 28-29
- (87) 68年2月発行の初版序によれば、1952年ティンペーミンはブリティッシュバーマ映画会社のためにシナリオ『ティーダーピョン』を書いた。執筆料は十分支払われたが諸般の事情で映画化はなされなかった。そして近年シナリオが同社内で、ある監督と俳優によって発見され、映画化に至った。それに触発され、『東より日出するが如く』以来長編の書けなかった彼は長編執筆意欲にかられた。折りしもボウタタウン紙の紙面刷新の時期にもあたり、小説化したという (B-22, P. 3-4)。長期の長編の空白を破る直接の契機はシナリオ発見と映画化であり、そしてボウタタウン紙面刷新にむけ映画とタイアップした看板小説でさらに広範な読者獲得が狙われたものと考えられる。
- (88) B-22, P. 507
- (89) 1909年生れ。漂流小説『善人』(1940)などがある。新文学論争時芸術性を主張しティンペーミンと対立。
- (90) B-34, P. 7
- (91) 同上
- (92) 1930年生れ。同書は67年出版。同年度民族文学賞第二位。J-3 参照。
- (93) B-23, P. 57
- (94) B-27, P. 51-52
- (95) 反植民地闘争などでなく様々な階層の人々の人生、生活を描く小説という意味で、軍事政権期からしばしば使用されるに至った述語である。
- (96) ただし、ティンペーミンの短編にみる新傾向についてはマウン・スンイーの批判があるが、詳細 J-4。
- (97) B-22, P. 492-493。
- (98) 「民族文学賞、民族精神と芸術賞」1964. 2. 7, B-21, P. 203

- (99) 「生死の哲学」 1964. 7. 10, B-21, P.288-289
- (100) B-13, P. 3, 1964年11月10日の序文
- (101) 「国軍兵士の立場と今日のビルマ文学の問題」 Atwe hnit Aye 1966. 3, B-31, P. 10
- (102) 「作家と批評家」 Ngwetayi 1966. 10, B-21, P.136-146
- (103) B-18, P.26, 序文
- (104) J-10, J-11参照
- (105) 「作者と読者の需給の一一致」 1967. 8. 3, B-21, P.153-160
- (106) 『進歩僧』（1936）と『ストライキ学生』（1937）の執筆時期が接近する他は長編執筆に2年以上の間隔がある。
- (107) B-24, P. 1, 序文
- (108) 「人々のための科学文学」 1967. 2. 13, B-21, P.185-189。政府広報局サー  
ペーベイマン主催で科学者文学者を招待して2月13日開催の科学討論会に言及。
- (109) 「話し合う科学者と作家」 Myawaddy 1967. 4, B-21, P.346-354。性病撲滅を訴える彼の『現代の悪靈』（1940）が科学小説の範疇に入れられたことも彼を刺激したという（B-24, P.14-15, 序文）。
- (110) 「鍊金術に似た科学小説」 Cindwin Journal 1967. 4, B-25, P.295-300
- (111) B-24, P.16, 序文
- (112) B-24, P. 4, 序文。この時執筆されたのは「メルギーの貝の中の真珠」  
(Thwethauk 1954. 8-55. 5, B-12所収)
- (113) B-24, P.14, 序文
- (114) B-24, P. 5, 序文
- (115) B-12, 出版者はしがきP. 3で、ありきたりの紀行とは異なると評価。
- (116) 同上P. 5でも作家の見聞を芸術的に描くと評価される。
- (117) B-16, 出版者はしがきP. 8。また、小説的文体で専門書のように読みづらくな  
いというB-20についての評もある（メーケン「1966-67年に読んだ本」 B-  
39, P.14-15）
- (118) 前者は1961年3月末のアジア・アフリカ作家会議東京大会出席のための訪日と、道  
中訪れたベトナム民主共和国、中華人民共和国、タイ、香港について書かれ、後者

は1961年9月、アメリカ政府招待による印刷出版事業視察のための訪米と、道中訪れたインド、パキスタン、レバノン、エジプト、イタリア、イギリス、フィリピン、香港、タイについて書かれて61年9月13日から62年1月10日ボウタウン紙に連載。他に57年連載の英仏紀行B-16が64年に「旅行記小説」と銘打たれて出版されるが小説ではなく紀行である。

- (119) B-10, P. 5
- (120) 『選挙の体験』という小冊子で出版後B-12所収。「敗北に対しもどかしさも後悔もない。恋人の如き有権者がなぜ私を拒否したか冷静に考えれば、彼らに同情する。私に票を入れたとすれば、さらに同情するべきであろう」と皮肉な心情を吐露する(B-12, P. 326)
- (121) 62年12月23日から31日ボウタウン紙連載後63年出版されB-12所収。
- (122) 63年12月21日から64年1月15日同紙連載後B-12所収。
- (123) 「レー・ティー僧正とマハーバンドゥラ」1964. 7. 17, B-21, P. 548-551。 「ナワードーとボウワズィヤのサータウンへ」1964. 10. 24, B-21, P. 372-377。
- (124) 『ストライキ学生』(1937) 冒頭がブダリン駅のシーン。
- (125) 「ブダリン駅とセンダン樹」Ngwetayi 1966. 10, P. 23
- (126) 同上P. 24
- (127) 66年3月18日から6月16日ボウタウン紙連載、67年2月出版、67年度民族文学賞一般の部で一位。小説以外の分野で初めての受賞である。
- (128) B-20, P. 319
- (129) 「躍動する勤労大衆」B-34, P. 3
- (130) 「パレー・ガンゴー間とガンゴー・アイカ間」B-35, P. 3
- (131) B-23, P. 60-62, B-27, P. 45
- (132) B-27, P. 44
- (133) 同上P. 43
- (134) 同上P. 47
- (135) B-2, P. 302
- (136) もう一点些末な事項であるが人物名の類似をあげれば、『海…』のタンスインは『ティーダー…』の画家と同名。また『ティーダー…』のバチュンの本名ピヨンチヨ

ウ（ティダービョンには父の名の一字がつけられた）は『愛すればこそ』のヒロインに求愛する誠実な中年研磨職人と同名。各々性格容貌は全く異なる。ビルマ人に同名者は多い（生まれた曜日で命名）が、テインペーミンの小説に同名者はこれまでほとんど見られなかった。

### 文献

- B - 1 Aung Than "Hsechaukhnit Naingnganye Atweacoungmya" 1966 2nd ed. Rangoon
- B - 2 Dagon Shwe Hmya "Myanmar Naingngan Sapehsumya" 1972. Rangoon
- B - 3 Lanzin Dhadinza Edita Ahpwe "Nyeinjanye hnit Thein Pe Myint Andaye" 1964. Rangoon
- B - 4 Malihka "Myanmar Wuthtu Ahnyun "vol. 1-5, 1968-73. Rangoon
- B - 5 Man Nyunt Maung "Thein Pe Myint Youkpounghlwa" 1980. Rangoon
- B - 6 Taik Soe & Min Yu We "Myanmarza Meikhpwe" vol. 2, 1966. Rangoon
- B - 7 Thein Pe Myint "Chit ywe Hkawya" 1952. Rangoon
- B - 8 Thein Pe Myint "Kyaw Nyein" 1961. Rangoon
- B - 9 Thein Pe Myint "Chitkyiye Hkayidhe" 1962. Rangoon
- B - 10 Thein Pe Myint "Anauk ko Shaukpa lo Ashe go Hmyawlaikyin" 1962. Rangoon
- B - 11 Thein Pe Myint "Budalin Hsaungbamya" 1963. Rangoon
- B - 12 Thein Pe Myint "Pyidhujahma Ahman Sha" 1964. Rangoon
- B - 13 Thein Pe Myint "Tekkatho Meikset" 1964. Rangoon
- B - 14 Thein Pe Myint "Twehsoung Hswenweye Atwinye Apyinyemya" 1964. Rangoon
- B - 15 Thein Pe Myint "Hsaya Lun Attoukpatti" 1964. Rangoon
- B - 16 Thein Pe Myint "Wodawa Pari hnit Nyeinjanye Hkayidhe" 1965.

Rangoon

B - 17 Thein Pe Myint "Myanmar Sapay Atwedwe Pyatthanamya" 1966.

Rangoon

B - 18 Thein Pe Myint "Wuthtudo Baungjouk" 1966. Rangoon

B - 19 Thein Pe Myint "Mawsitoung Tayouk hnit Myanmar Achoukachaana" 1967. Rangoon

B - 20 Thein Pe Myint "Withetha Taing Thamaing Asa" 1967. Rangoon

B - 21 Thein Pe Myint "Taikpwewin Samya" 1968. Rangoon

B - 22 Thein Pe Myint "Thi Da Pyoung" 1968. Rangoon

B - 23 Thein Pe Myint "Kyanaw Wuthtumya dehma Kyanaw Zathsuangmya" 1969. Rangoon

B - 24 Thein Pe Myint "Anawa Hkayidhe hnit Pale Dewi" 1969. Rangoon

B - 25 Thein Pe Myint "Sabaungzu Sapay Webanye" 1971. Rangoon

B - 26 Thein Pe Myint "Sabaungzu Pyinnyaye" 1971. Rangoon

B - 27 Thein Pe Myint "Sapay Swenwebwe" 1975. Rangoon

B - 28 Yangon Ba Hswe "Thein Pe Myint dho Eikhpwinza" 1964. Rangoon

B - 29 Yebaw Hla Myo " Thein Pe Myint dhomahouk Apegan Naingnganyedhama" 1961. Rangoon

B - 30 "Atwe hnit Aye" Feb. 1966

B - 31 "Atwe hnit Aye" Mar. 1966

B - 32 "Atwe hnit Aye" Sep. 1966

B - 33 "Botahtaung" 26, Jan. 1962

B - 34 "Botahtaung" 31, Jan. 1968

B - 35 "Botahtaung" 8, Feb. 1968

B - 36 "Botahtaung" 24, Jul. 1968

B - 37 "Ngwetayi" Aug. 1966

B - 38 "Ngwetayi" Oct. 1966

B - 39 "Thwethauk" Aug. 1967

E - 1 Robert H. Taylor "Marxism and Resistance in Burma 1942-1945

Thein Pe Myint's Wartime Traveller" 1984. Ohio

- J-1 今川映一『ネ・ウイン軍政下のビルマ』アジア評論社 1971
- J-2 チェーモン・ウー・タウン『ビルマでいま、何が、起きているのか?』梨の木舎  
1991
- J-3 マウン・マウン・ピュー『初夏霞立つ頃』大同生命国際文化基金 1990
- J-4 南田みどり「テイン・ペー・ミン短編小説の世界」『外国語外国文学研究』創刊号 大阪外国语大学修士会 1977
- J-5 南田みどり「テイン・ペー・ミンにみる伝記文学」『外国語外国文学研究』3号 1979
- J-6 南田みどり「テイン・ペー・ミンの小説における女性像のゆくえ」『大阪外国语大学学報』第47号 1980
- J-7 南田みどり「テインペーミン年譜」『大阪外国语大学学報』第50号 1980
- J-8 南田みどり「テインペーミンとキッサン文学」『大阪外国语大学学報』第52号 1980
- J-9 南田みどり「テインペーミン著書目録」『大阪外国语大学学報』第53号 1981
- J-10 南田みどり「戦後ビルマ文学の動向」『現代タイ文学の発展』 トヨタ財団 1982
- J-11 南田みどり「ビルマの文学」『日本の科学者』vol. 19, No. 11 日本科学者会議 1984
- J-12 南田みどり訳・解説「テインペーミン著『ビルマで何が起ったか』をめぐって」『大阪外国语大学アジア学論叢』創刊号 大阪外国语大学アジア研究会 1991
- J-13 南田みどり「『東より日出づるが如く』にみる1950年代の影」『大阪外国语大学アジア学論叢』第2号 1992
- J-14 テインペーミン『東より日出づるが如く』井村文化事業社 上巻中巻1988 下巻 1989
- J-15 社団法人国際情勢研究会『ビルマ軍とその性格—武装せる政治集団—』 1962

## Between Fact and Fiction —Thein Pe Myint's Two Long Novels in the 1960s—

Midori MINAMIDA

Thein Pe Myint didn't write long novels for more than ten years after completing "As Sure as the Sun Rising in the East" in 1957, one of the longest novels post-war Burma. After such a long vacuum, he wrote "Thi Da Pyoung" in 1967-68 and "The Sea Travellers and Pearl Queen" in 1969. Though these two novels adopt the first person narrators like "As Sure as the sun Rising in the East", their contents differ much from it. The greatest difference is that the author less appeal the contemporary political problem in them than in his former one.

One of the moments is thought that he established Botahtaung News-paper in 1958 and started to write the social and political problems directly for it. There seems to be every indication that he preferred writing non-fictions to fictions, for the former is more effective and direct means of appealing his views.

This paper is a sequel of my former one, "Thein Pe Myint in the 1950s and 'As Sure as the Sun Rising in the East'". In this paper I examine his works written in 1958-68 and consider the problems of these two long novels. The contents are as follows.

### Introduction

1. Thein Pe Myint's view of Burmese society in 1958-68
2. Thein Pe Myint's view of Burmese literature in 1958-68
3. The features of "Thi Da Pyoung"

4. Some problems of critiques and refutation on “Thi Da Pyoung”
5. Thein Pe Myint’s accounts of travels and “The Sea Travellers and Pearl Queen”

Conclusion